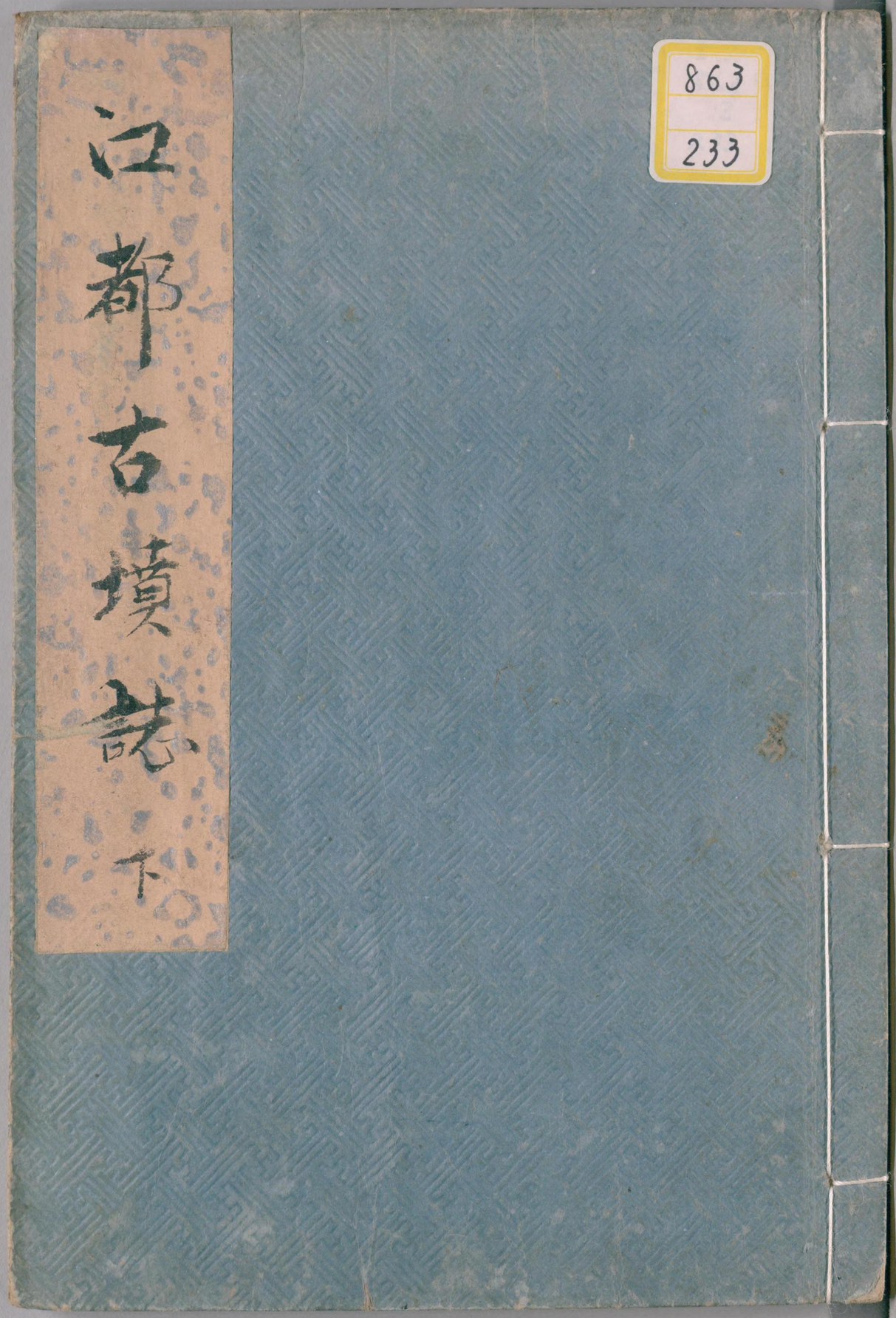


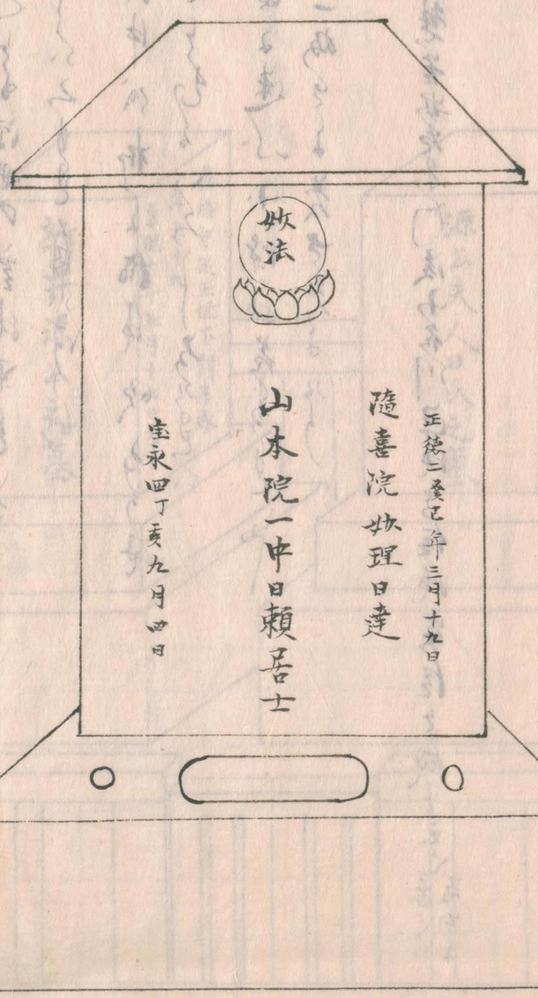
863
233

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

863-233

帝國圖書館藏書



法華長講山本法華堂立り

慈音安居来門墓

隨喜院妙理日達

正徳二歳己卯三月十九日

山本院一中日頼居士

寶永四丁亥九月四日

國立圖書館
昭 24. 3. 29 和

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

二水三水曰水ふ咲そのふ
みのる道法まるこそ
まくくる海世の雲地家を
くそくふふまる食ふ
安地中成柳る地地
物をもるくくる
多品る速ふ小蜂地
ちる一物そる花まる
ふまり

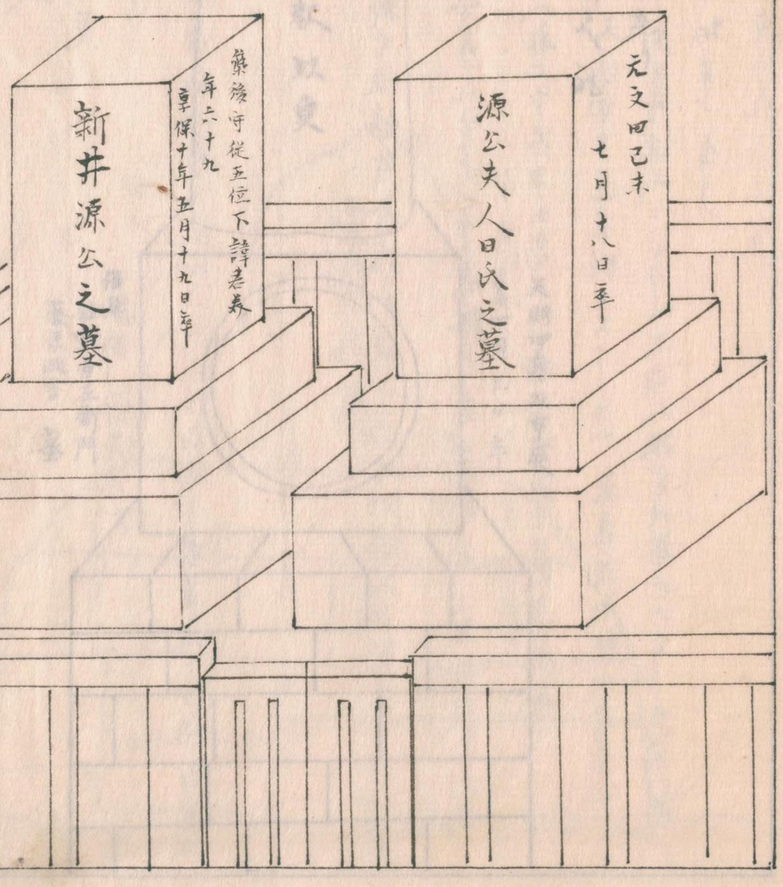
板切る夏字の以前米大生地熊谷安西門浅小谷川田子信地安住を風とそくくふ
ねりる

みろく寺 熊谷 極楽勧定地人ら

新井玄石墓

法号 高竜心教恩寺塔所

宗雄寺ら年り



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

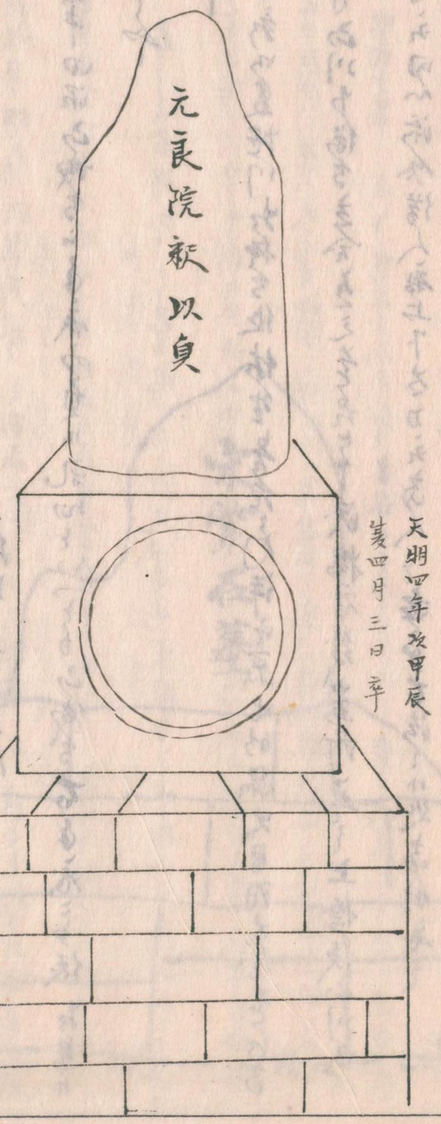
白石先生小牧の新四ノ後、添水装置解体と称す大傳ノ水下頃高地門人ノ

神名政字左中白石ノ号ノ

佐野政言墓

法号東幸寺殿神田正法年寺ノ号ノ

報行ノ石ノ高サ二尺

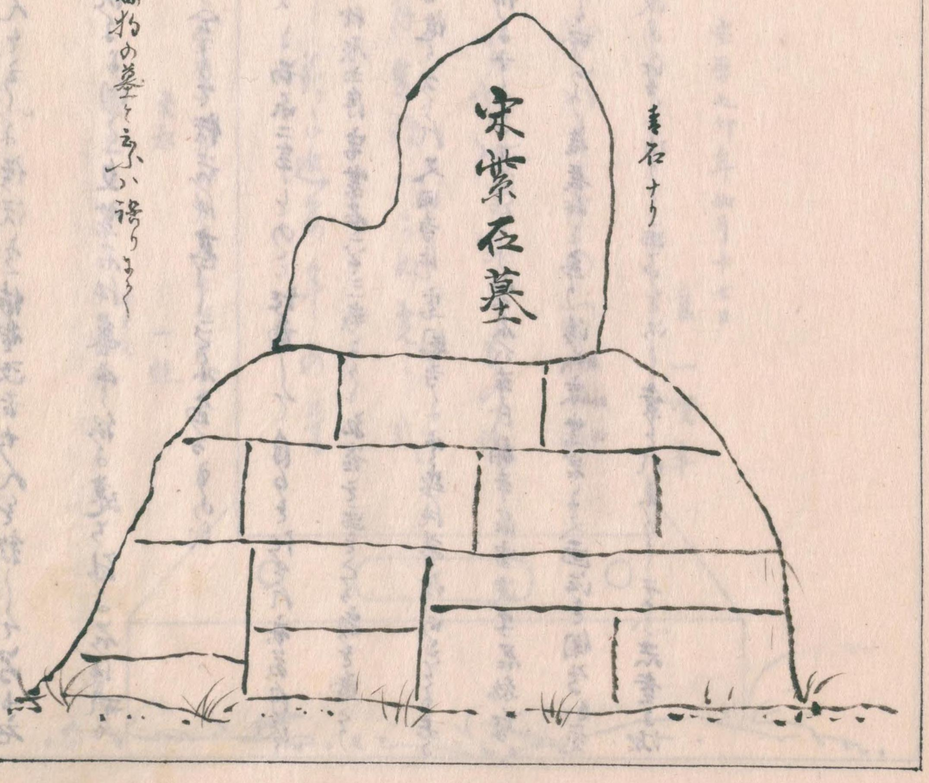


国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

宋紫石墓

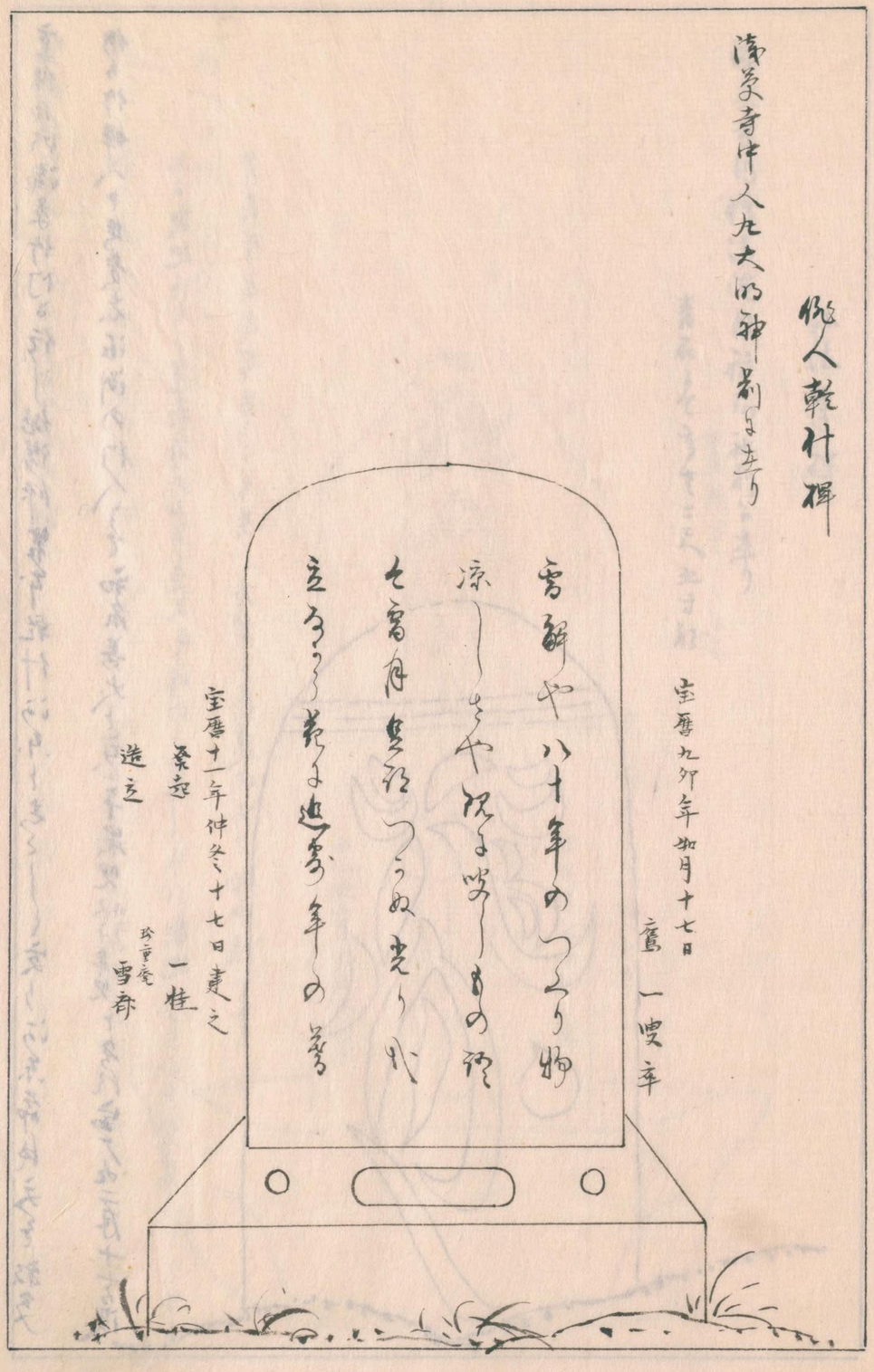
大全徳寺寺ヨリ



宋紫石墓ハ牧野政吉氏ノ私有ニ帰シ其ノ墓ヲ永ク保存セラルヘキ旨ヲ語リタリ

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



仏像を世よ経物の事をいふ珠之物をでちんを敷してる也
此の庇一ヲ江のつゞ今血も如きいぎる刀と云ふ依流よりの
ゆゝ経物はすゝゝよ仏ゝろよつゝ松を峯会しゝて松流地高ゝこゝ水ゐるまの氏
豊玉梅ゝよ紫石地政年洋ゐゝ氏墓所一覧よ前永二年とめこと記載して自ゐを記さで来る自珍
ゐ郡江年表よ最島南嶺修幸よ西永七年仏辰五月宗栄石二字三歳ゐゝ死者を画ゐゝる額を薫ゐ
依ゝ徳年寺よ新ゐ弓ゝよ石碑ゐりゝ高日徳ゐゐゝ又同寺本宗恩寺よ生歩地墓碑ゐゐても書よ
洋ゐゝ氏とゝえゝゐゐよ梅ゐゝ今生月ゐを洋よすゐる所由ゐゝ栄石八年氏楠幸宿雪渡宇居称江戸
人表和南蘋地画法を熟受よ学び大よ自得すゐ所ゐり後長崎よ多り清人宋紫岩よ又画法を蘭ゐ知覚
すゐ所ゐゝ遂よ宗改を昌一号を紫石よ改め江戸よ地ゐゝ画ゐを次ゝ業とゐ居ゐゝそゐ未壽よ依
つゐゝ生涯一的よ画をとゐ

江法等禅

滝泉寺門修法院門福寺社前ヨリ来リ

青石ヲ以テ亭ヲ二天ヲ立ス所

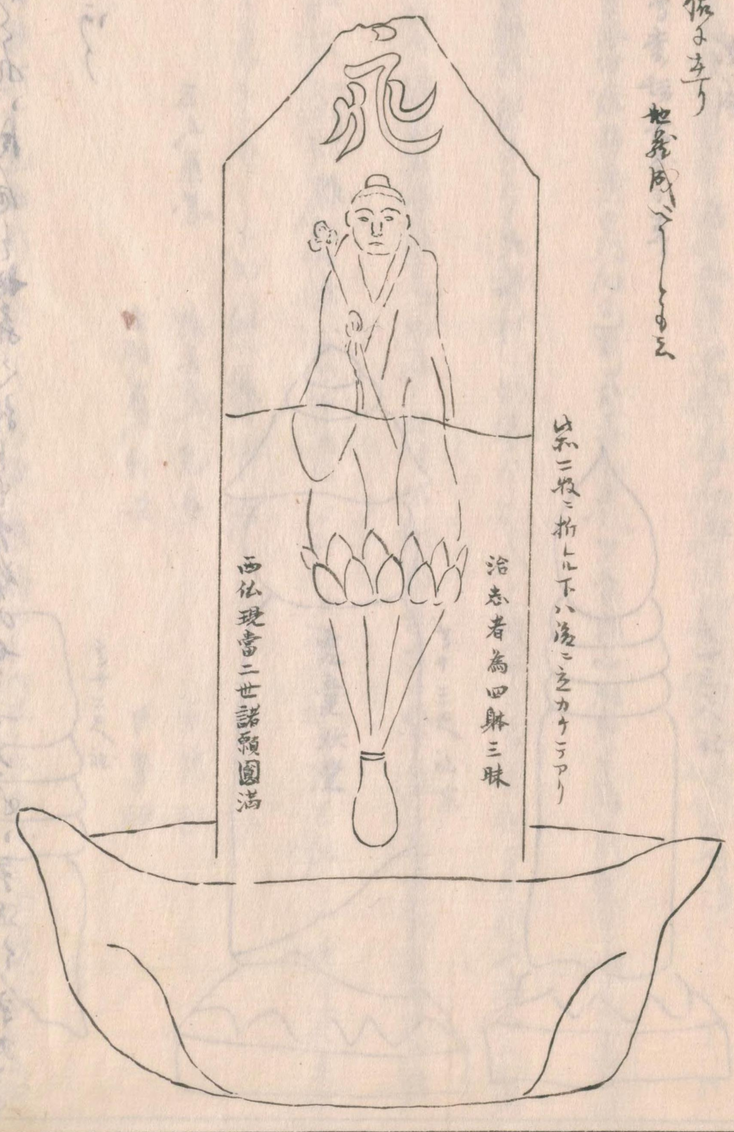
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

空海筆ろく〳〵とを写て右を校ゑ

附云法〳〵古跡をえらぶよ上のごとく精舎二三箇乃至四五箇をえらびつけ〳〵学〳〵しく衆処にうつることを禁ずるものとしてあよ上よ歩処にうつる道元在の上よりえ又生ぢ後めて学〳〵しく衆処にうつることを禁ずるものとしてあよ

道元在生号右ろくこちまく右右よ若達の外をあを満ろく



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233
ガラス使用

高サ三尺弐寸
高サ三尺弐寸弐糸
高サ三尺弐寸
宛寛效邊

世ゟ云椅懃竹成淡成ゟ云大ゟ誤れり一人い古師は生人件ゟ一人い椅前連淡成一人い椅前連
竹成と武成ゟる時ゟ三人ゟ又一の権現を進申候を乗りしゟ事ゟ飯世事の上ゟせのゟし〻不幕事迄右残
なりと考考物語ゟ

古師真人　件ゟ　　書物
三人乗ゟ　椅前連　淡成　　林坊
　　同姓　竹成　　考坊

右等書物長石の碑い右三人（三坊三人のまゟ）猶師の墓ゟ中ゟ空の中ゟう大慈閣と云額を掛ゟり椅懃事考物
ゟ世界大守平云権現懃仏の額事黄金仏ゟて四長ゟ五ゟ記迄有ゟ（文化十年書物ゟい額事同前引上ゟてゟる大慈行ゟ秘物ゟし
ゟる）て人ゟ足手ゟるゟを田ゟゟ所又右件引上ゟる細此書ゟ燒物ゟ常事椅曰我弱年の時ゟ迄ゟ長ゟ云ゟて金数ゟ
書ゟ行ゟ八十事ゟゟりしゟ山書ゟ語ゟ赤ゟ壮年の時ゟ山ゟる迄自性院ゟ任命候書ゟりしゟ今ゟ九
てゟりしと語ゟる又云椅懃竹成淡成三人共墓ゟい今ゟ椅前連淡成一人い椅前連

ゟなゟれす今ゟい共書ゟ書物所　星天模町通り院事書物い中田氏法界院ゟ又決書物ゟ事物
三人い淡事竹門ゟ任事書物ゟ重科門柏金発売候事ゟ（此自ゟる面事ゟ書物長石ゟ三十年
ゟゟれ当ゟて他人ゟ自ゟ支配ゟる）
院事書用ゟ此事ゟ有ゟ事ゟ人ゟのゟゟゟ右三人ゟ猶師の五輪ゟ云ゟゟゟ右三坊ゟり出して
此事ゟ又ゟゟゟ古仕候ゟ書ゟえゟ三坊ゟ事ゟゟゟ椅前ゟ事書ゟゟる物事ゟ又ゟゟ大指
の事ゟ事ゟ面ゟ事ゟゟゟ淡石又ゟ伊勢物語ゟ書ゟれ江戸事ゟ任候事ゟて大力書ゟ
くゟゟゟゟくゟゟ書事ゟ淡ゟゟゟ人ゟ事ゟ結ゟゟ場ゟれゟゟえて並ゟゟゟ

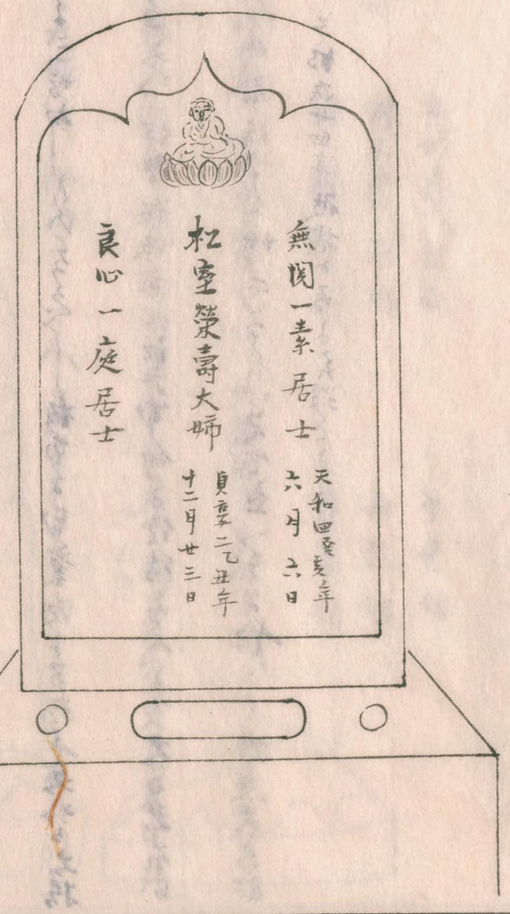
附云件墓石淡事ゟ書ゟ多ゟ事ゟし文政廿四年破壊の為ゟ事ゟ

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

久米年間墓

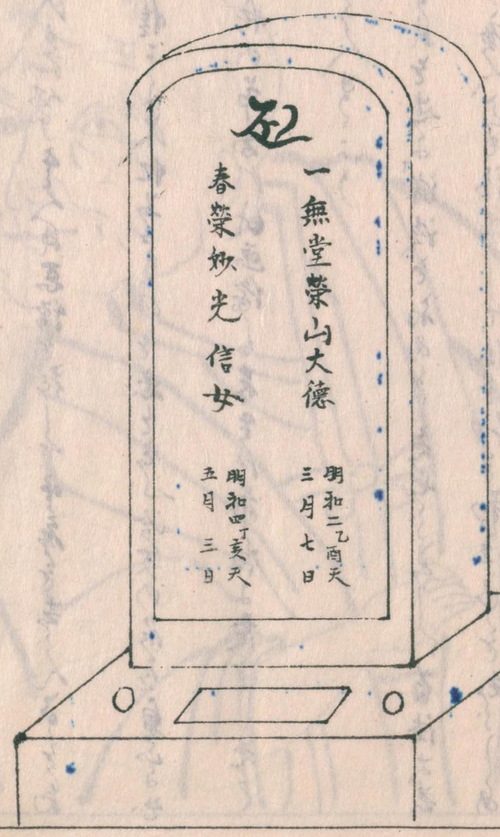
浦家寺門より左り

仁王門より浦家寺門前を通り候人々の墓



志道軒墓

浦家寺門より金剛院へ左り



金剛院より佛子寺三枚寺と云ふ浦家寺中之寺ハ北馬道佛角寺より北志道新兵衛墓ハ仰と佐ら候

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233

ガラス使用

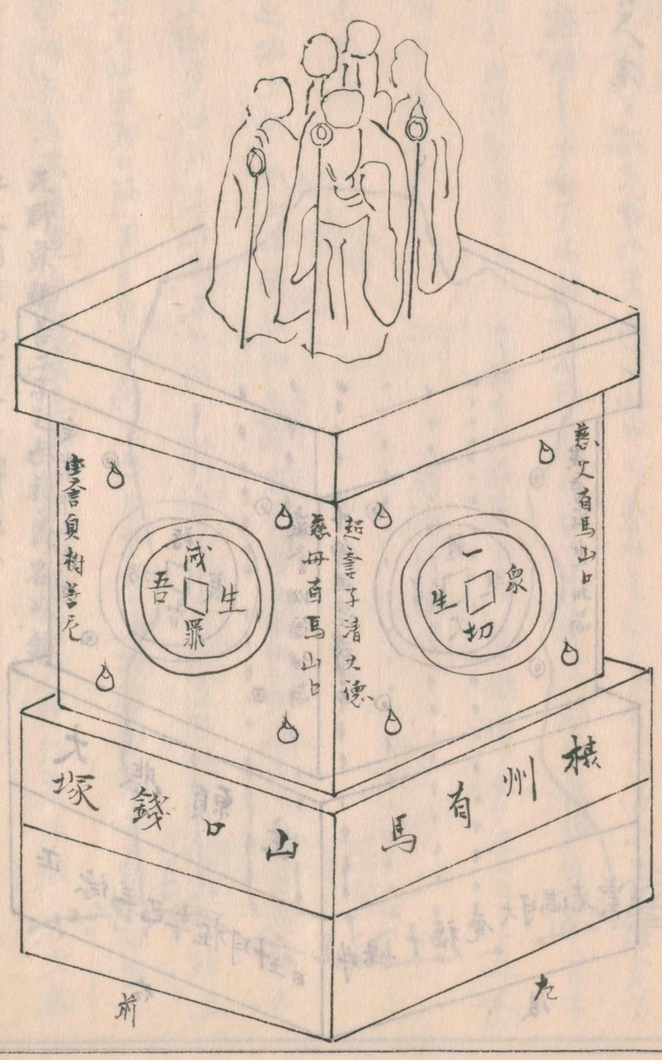
添井
志道軒の像

志道軒傳

志道軒といふ人は名を所之助といひて魂六元祿傳之助といふ浪軍波を生業として傳ふる事人
あり。其生涯と歸人を忘ちがたく。其事跡のもらん事を
浪々乞食家人婦人に生質おかしくして平生をよく笑ひ
浪を樽とりまく同人は画像同もよりの屋敷の前にあり
世上に流布せしは其画像を傳へ抔もらん人まゝにあり
魂人京世よ云三何後佛ち死を京ま此を述よ此
ま此ら上ま神元此此浪り彦人よ此浪
ま此ら純此教定よ此ち京中後実政年中よ講後師と云ふ者
此義に當世ふも元に孝ふ。小説ま見に海せれ
示ま此ふ詞ふ云に志道軒の浄世ふ

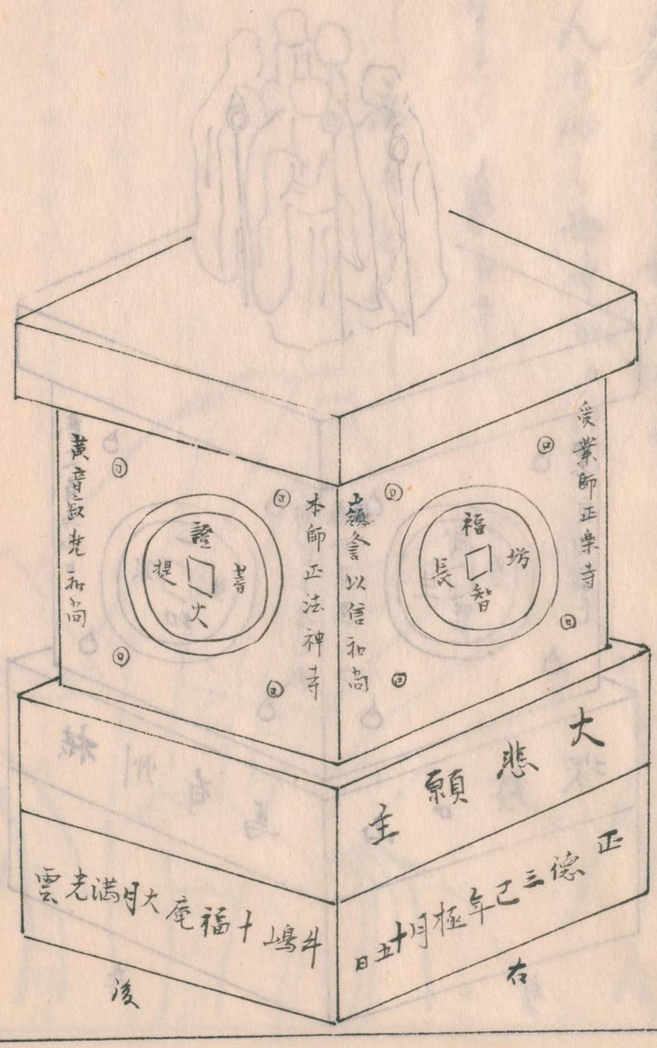
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233
ガラス使用

禅世



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



淨光寺中三社權現右銀

大森濱人奈祇之社

高サ七尺余

天野榮卿善二子之志施良石以鐫

此文因佛勒其名于碑後云

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

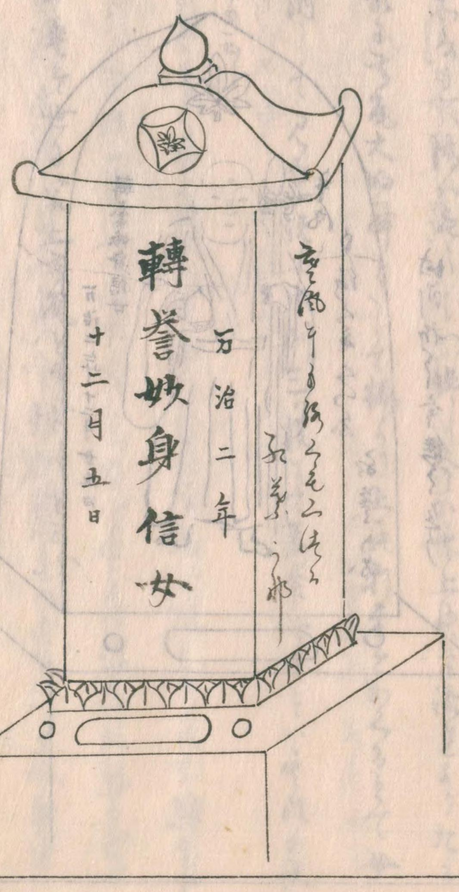
ガラス使用

推古帝三十六年春三月十八日此地漁人檜熊淡成竹成網得薩垂瑞像因安置厥今此金龍
山觀音大士是也三子效鄉人崇奉切以為鎮守之神今此三社權現即以大士出現之日祀之大
寿澳人出航供祭後帝例奉未嘗奚蓋大士出現之後如亦既為禁澳捕於是後澳人于大寿
村故如是矣雖無徵之文獻而其口碑不亡守千歲之後及空宇迎世貧富異志寂有網信士
飯山氏幸友氏憂之久因有欲復之之志不果而子飯山襲庄幸友重正繼父之志相共謀之
大寿村澳價奚費使出航之後永世永絶鳴呼是事不廢則二子與其父之志傳之無窮而
不朽哉聊記鐫石以示後来

明和八辛卯年春三月

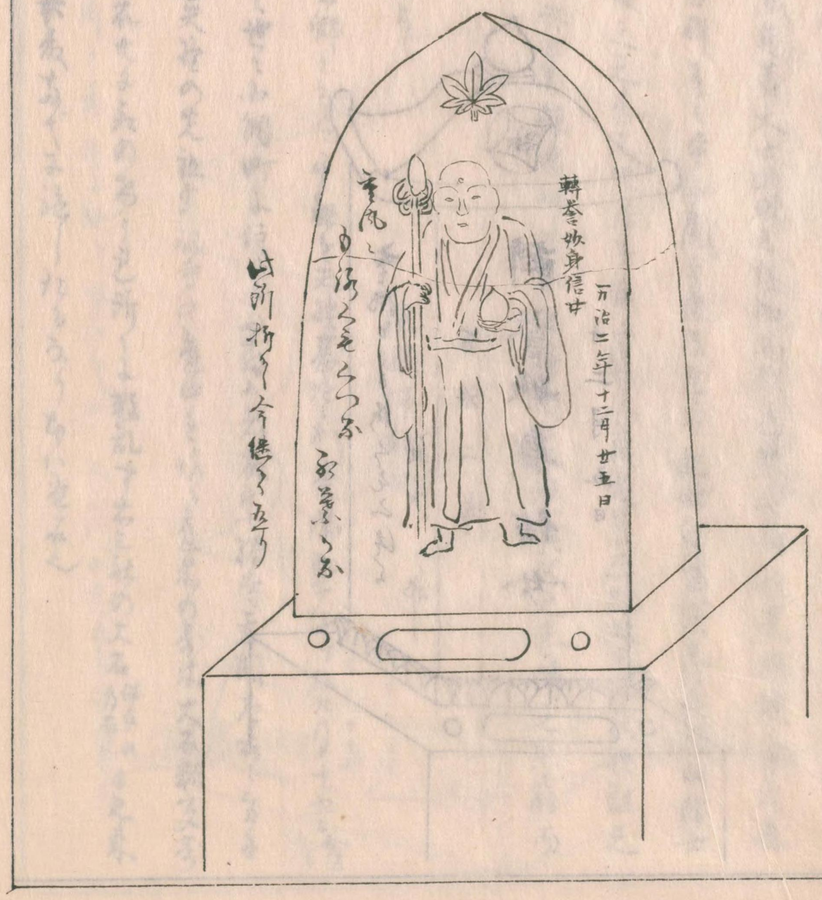
法眼伊敬白

[illegible]第門後隣之海湾山宗福寺の檀徒[illegible]て世と小網町よ往[illegible]
[illegible]石を表よ重厂九月の文字を鐫る右天社の先祖宗福寺純意住を修る意為の考妹大石数之等
近年今ハ酒井家の墳墓の場と成て寺石なる矣の為ら[illegible]
宗福寺を矣の一助石を天生帝師仏之衆為ならん迄[illegible]
[illegible]ならんことを(仏子[illegible]の文字)



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

同寺庵墓



寂誉三若檀隙弘願の西方寺なり
寺号ここに起る

寿永妙安寺庵七代

松寿寺庵
初代寺庵　傳誉妙順　松寿は三浦氏が開山弘教山寿福院西方寺能安妙順
法名の如く妙安寺庵ともいう

松寿寺庵と云ふ能く人の称する不名を云ふ檀方流とうたる
不そて永代檀川多学庵の祖よ寺庵大明神とうて上総永堂をひろうて
妙檀うんぬんの如き事明そて多一説なり中洲二の投りて義参せ
ましそ実に亭中そのまるこ

実正寺庵
二代目寺庵

紀慶五年実上寺庵開山して寿を世る実上寺庵と申せしとぞ

永谷寺庵
三代目寺庵

永谷後お寿日通水谷て唐根門をうけ生後て法華の門二十余後の祖なりとしてお
奉夫より神田恵氏等庵お為て檀の寿とうり来寿永堂と申してもうの後牧野勝孔

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

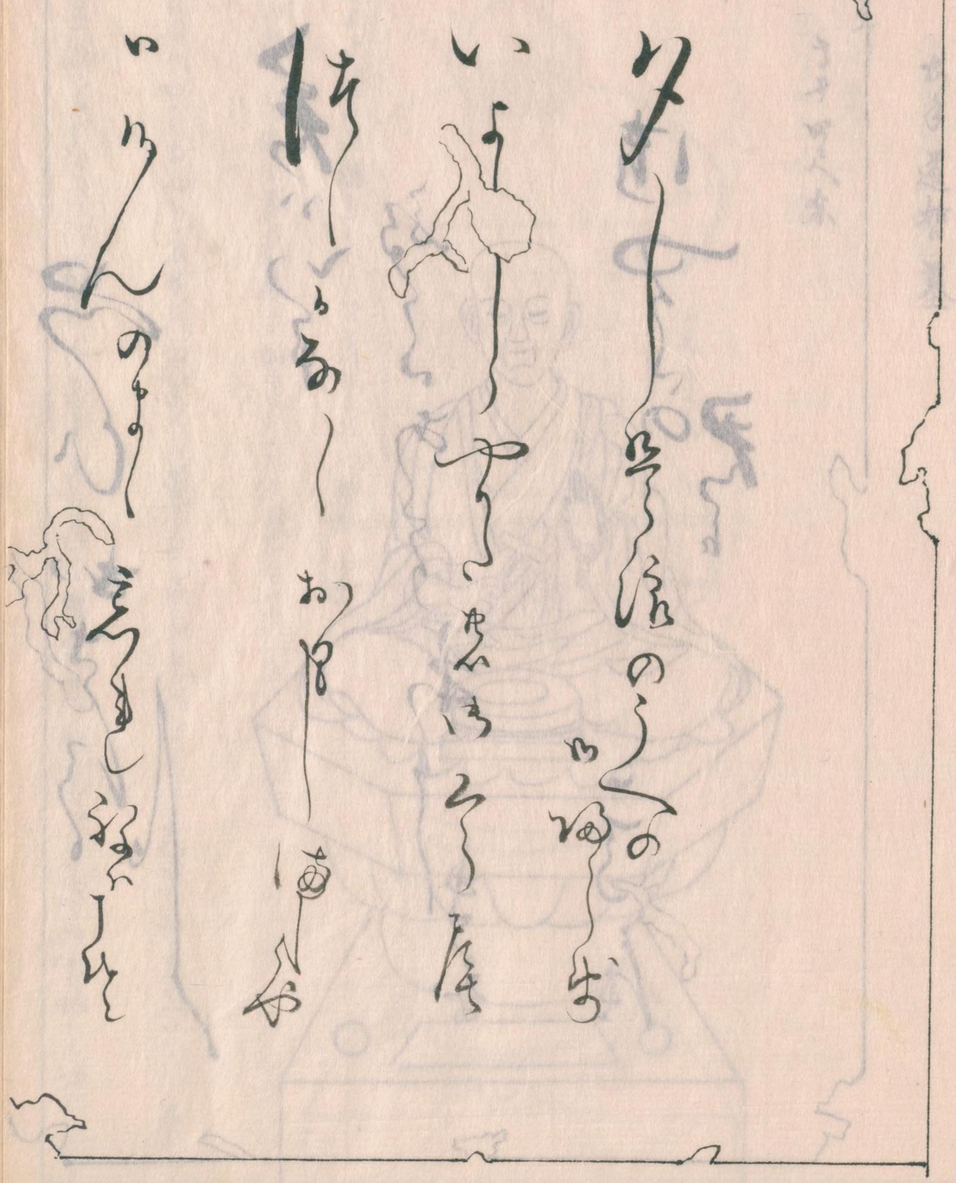
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

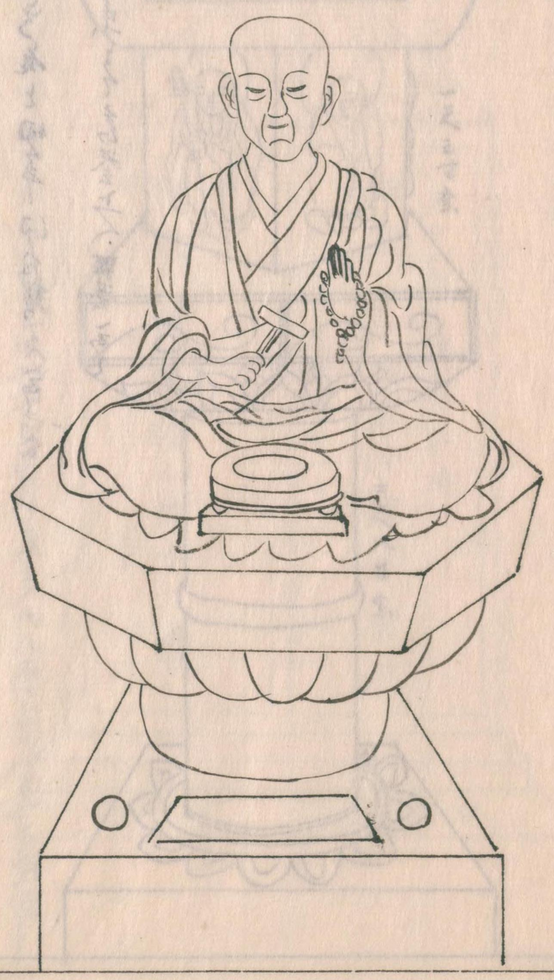
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



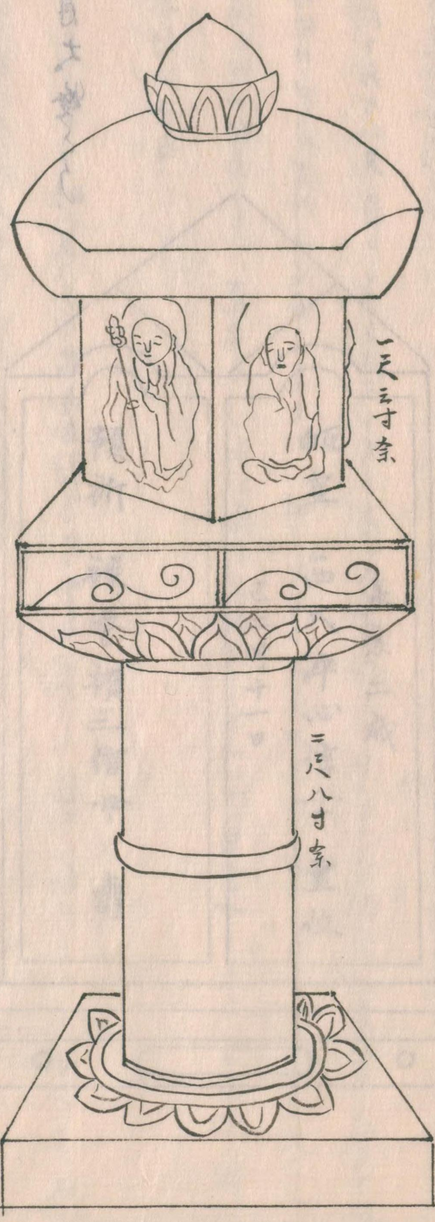
国立国会図書館　　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



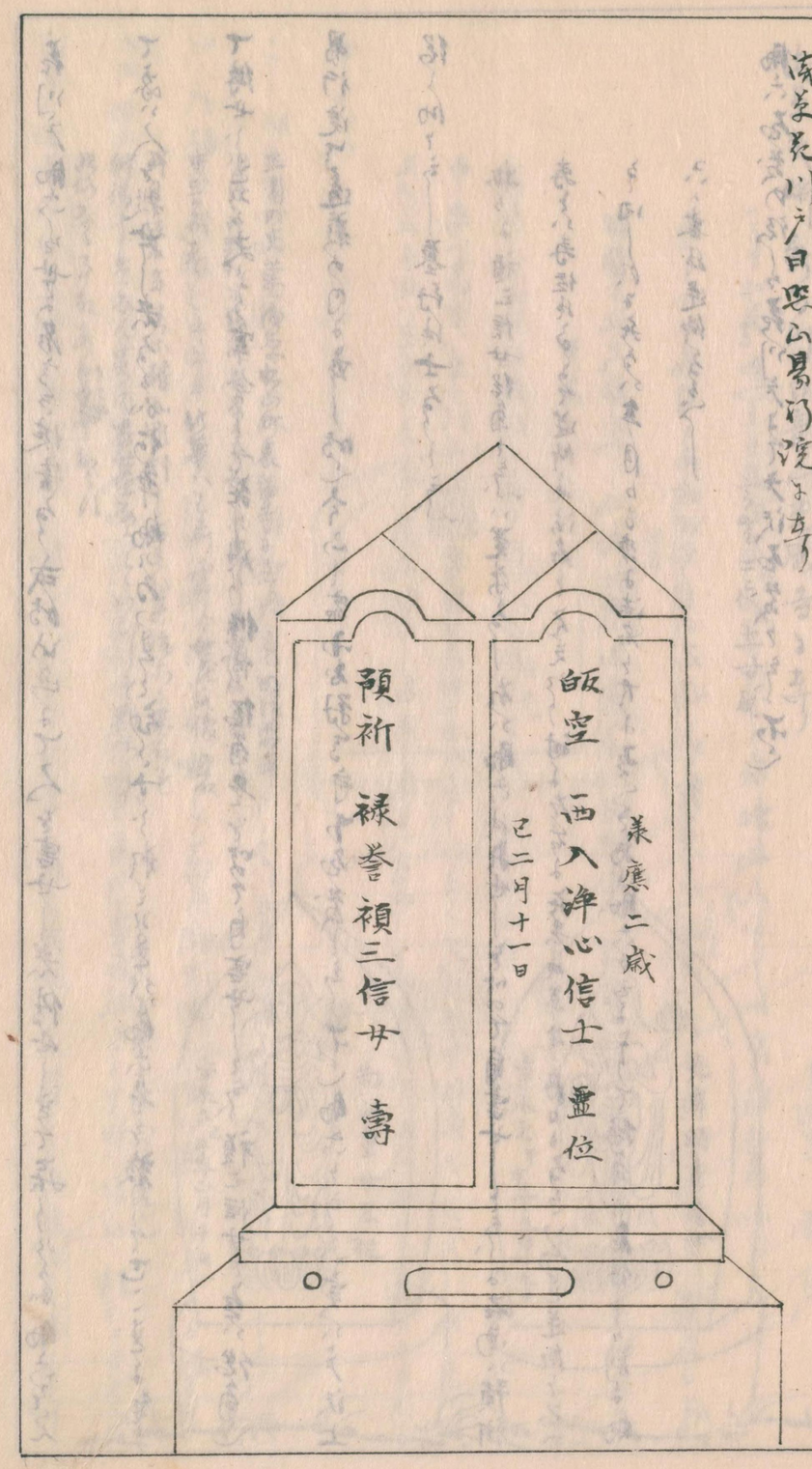
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233

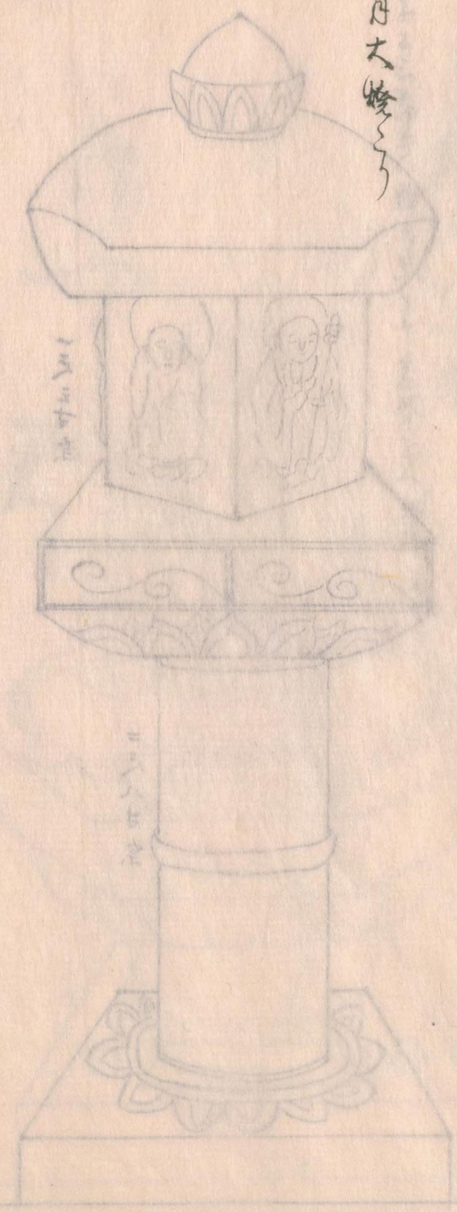
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



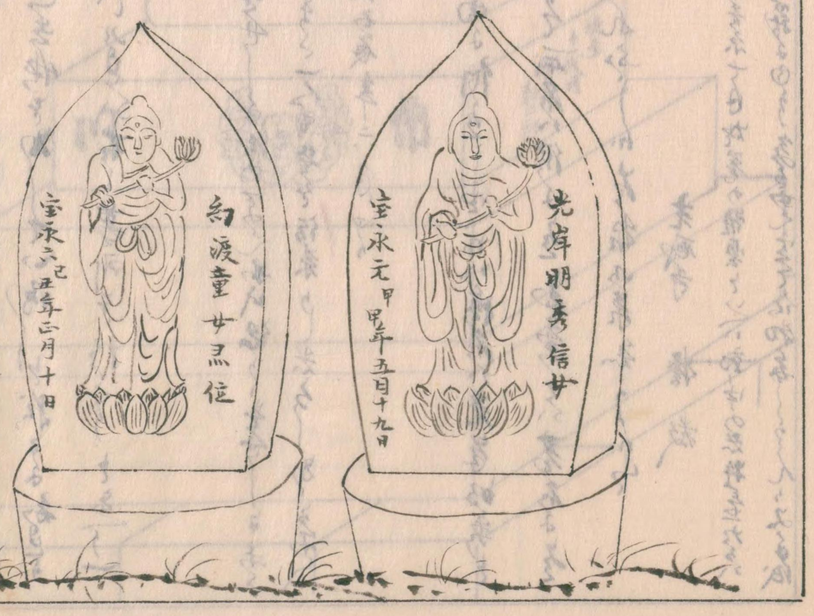


国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

若川氏助之女世女房なる俗家なる戒名山号まで入を害せ
て有之人を数世一来るるが行年助なる事を知ざる事
十餘世ともいふ夫より宰舎一て死一ケり依て俗名を以て自害せ一ケり
明行院て過去の日を五一時ごとに家中の對なる寺
給へる一墓所法士なるべし
物なる頃三保女俗名なる若い覚なる一有り助之俗
寿ある寿経なるて逆修法名を定ケり誤なる
を同一代なる我ある年月日も要る法名を有ある
二の表体逆修なるべし
助之石塔の法なる若川氏なて大沢石塔なる
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

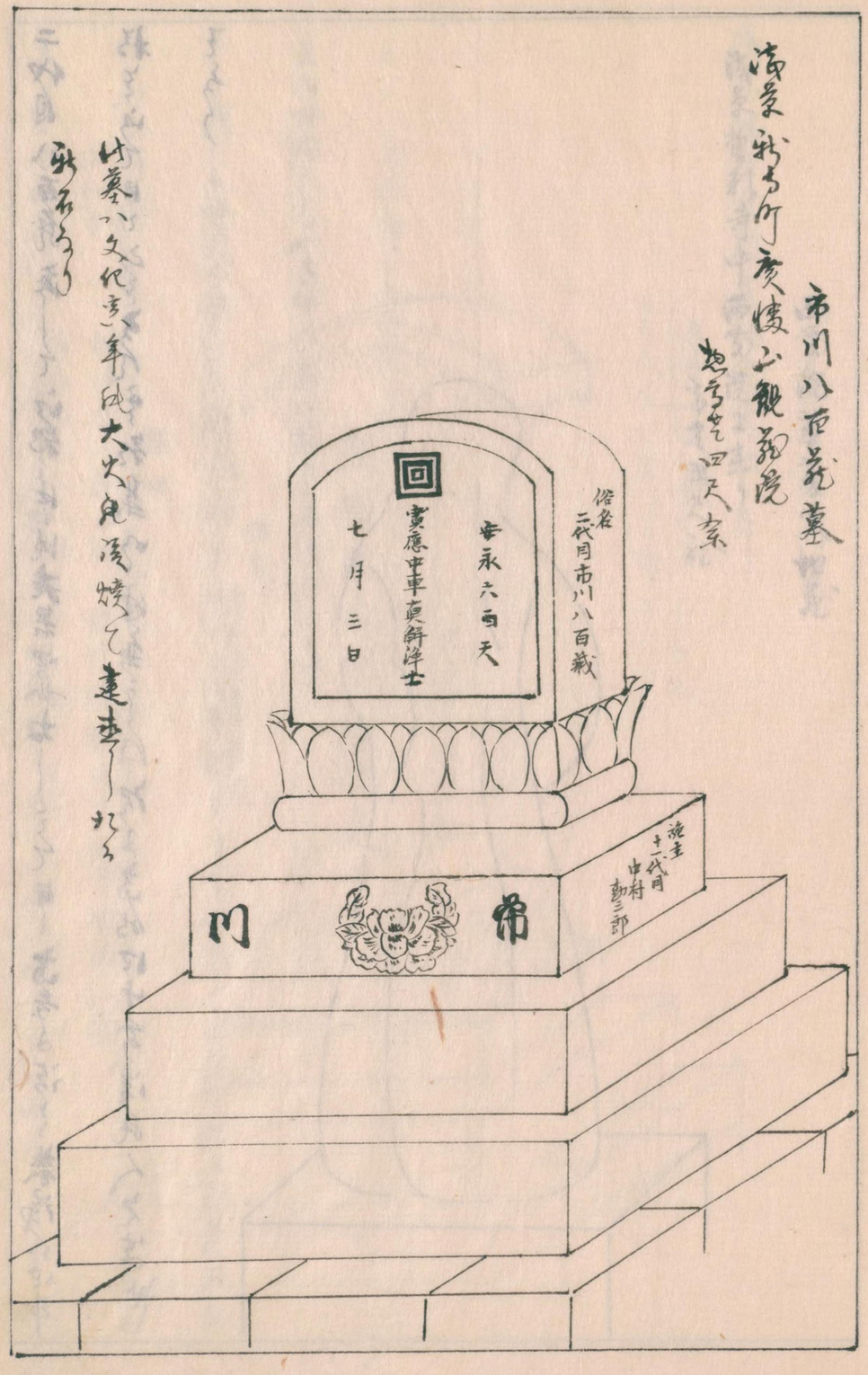
北女之墓

海晃院瞬誉妙白童女　元禄寺よ年
文化二乙丑年七月廿



王菊の実墓海晃水の所長福寺よ有しを明治廿年
八月石数なる行徒有なるを知ず得る事無之墓同西
中三ケ村なりしより此墓ハ之前より世話人俗名の名
斗なて法名等不確よ彫刻しなりハ其儘ある墓石を
仰得一事なる人実徒玉墓なるといふ一ケ所ある
共行なるる名あり

ガラス使用



市川八百蔵墓

演芸新古所感之概略

為右四天楽

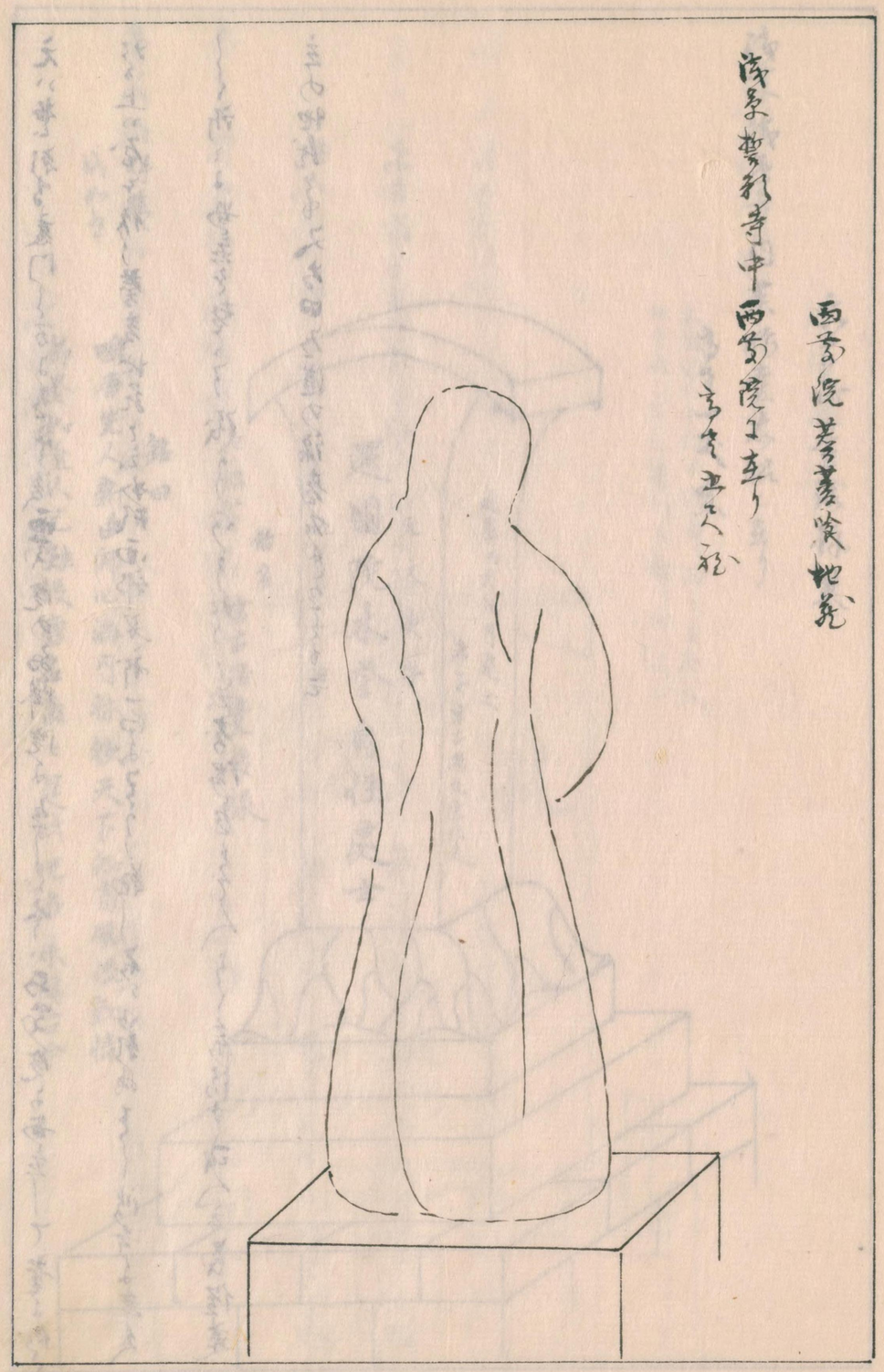
此墓ハ文化元年甲子大火ノ後焼テ建替ル

渚ある玉蘂の子光感寺幕といふ(とも知るべからず)を書り我も光感寺に弔ふ仁縁のを新吉仲
の町桐谷あるいは吉原の吉野寺へ葬ってより玉蘂のうち世を経る程なる
いつしか打絶墓碑を弔ふ者もなくなりぬるを聞いおどろきて
こゝに古き仏物を伺い求んとて住持雑談仏物をのぞく
ありふれ二三の玉蘂共仕りし夜なりき

又次に回向院光感寺にて古く墓不知とて名ある東の高僧(幸世一多慶のほか)共代記せず
ある東の高僧(幸世一多慶のほか)共代記せず
ありふれ二三の玉蘂共仕りし夜なりき

回向院
相撲三社大神宮ニ仕る物故玉蘂ありや此
ふるき二基目ニ小路四基目の石碑にて観音
ことを聞つるも名石に物を深く彫れ
桐谷主ありて
物を此墓ふるき玉蘂共ゆえ
いつこに移し仏物を伺い求んとて玉蘂ニ基の
ありふれ二三の玉蘂共仕りし夜なりき

光感寺 橋教



西京院芳著喫地発

陸象撃剣等中西京院之事

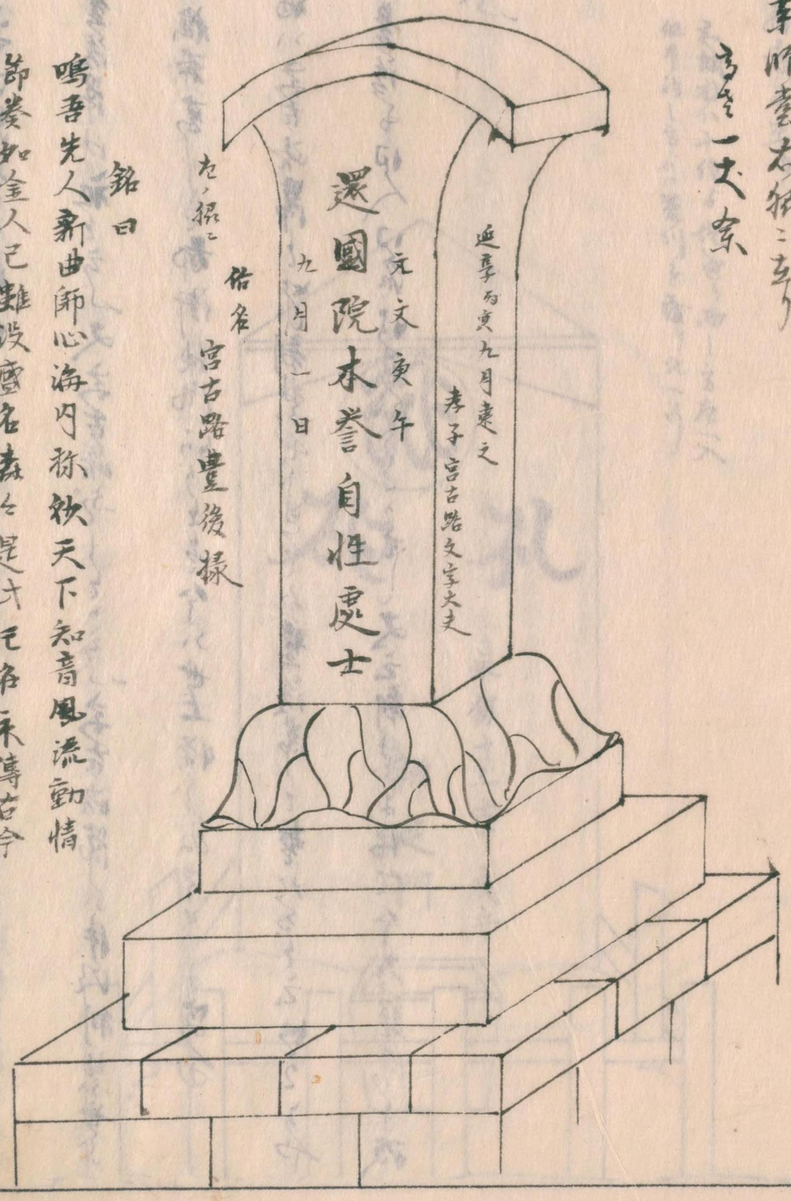
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

元い墨染寺と云ふ寺ありき後雲龍院の勅願院となり
かゝる上古を伝ふ墓地なれど如何面部多新一向よろこ
しく所ゝ墓石を整ふる後ふつゝかりと云事陽至
其の地元も又古田乃港の旅客多きとも云

宮古路豊後掾墓

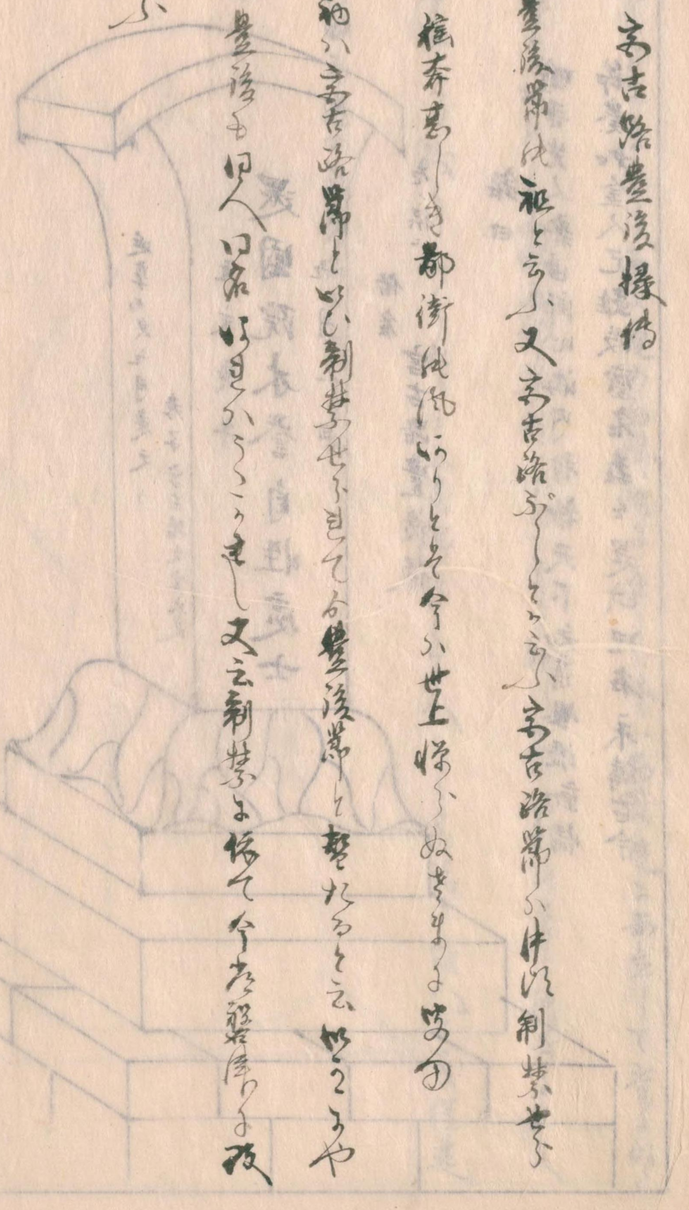
浄業浄業寺内業師素太郎ニより
高さ一丈余

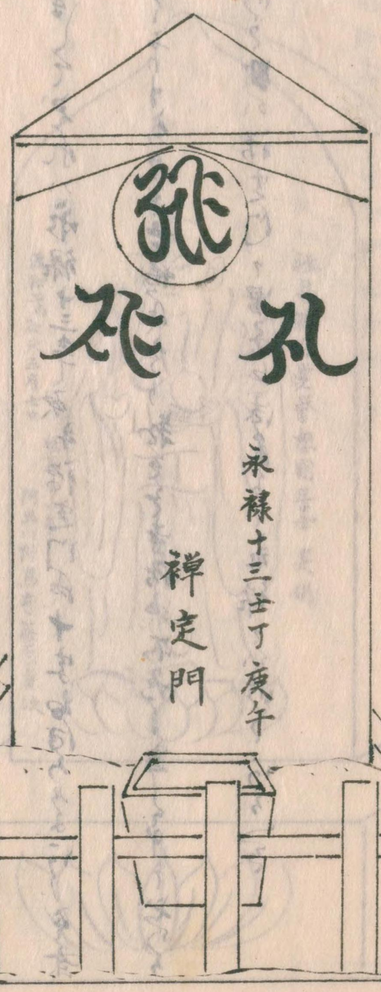


国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233
ガラス使用

高古路豊後掾墓

豊後掾高古路常純祖と云ふ又高古路常
当てと云ふ生前小槻奉高と共に都衛地頭にありし
我人共云祖ハ高古路帰京と共に制禁せられ
高古路も豊後も皆人に先立てから豊後掾と
むとも云ふ





定恵和尚墓

高槻村にあり性海寺の主り

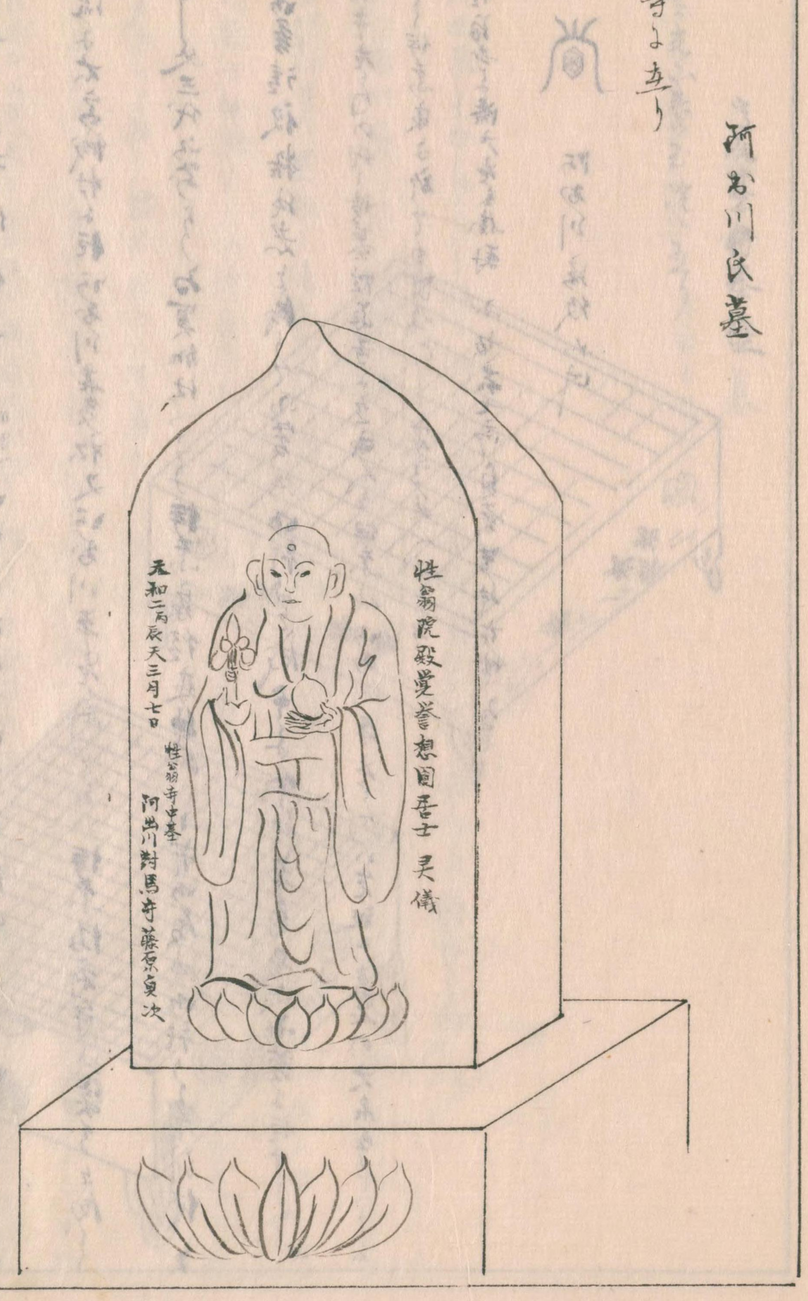
高槻村より十町余り悦巻り西し方左へ入
征矢後し方より小荒川を渡り北へ

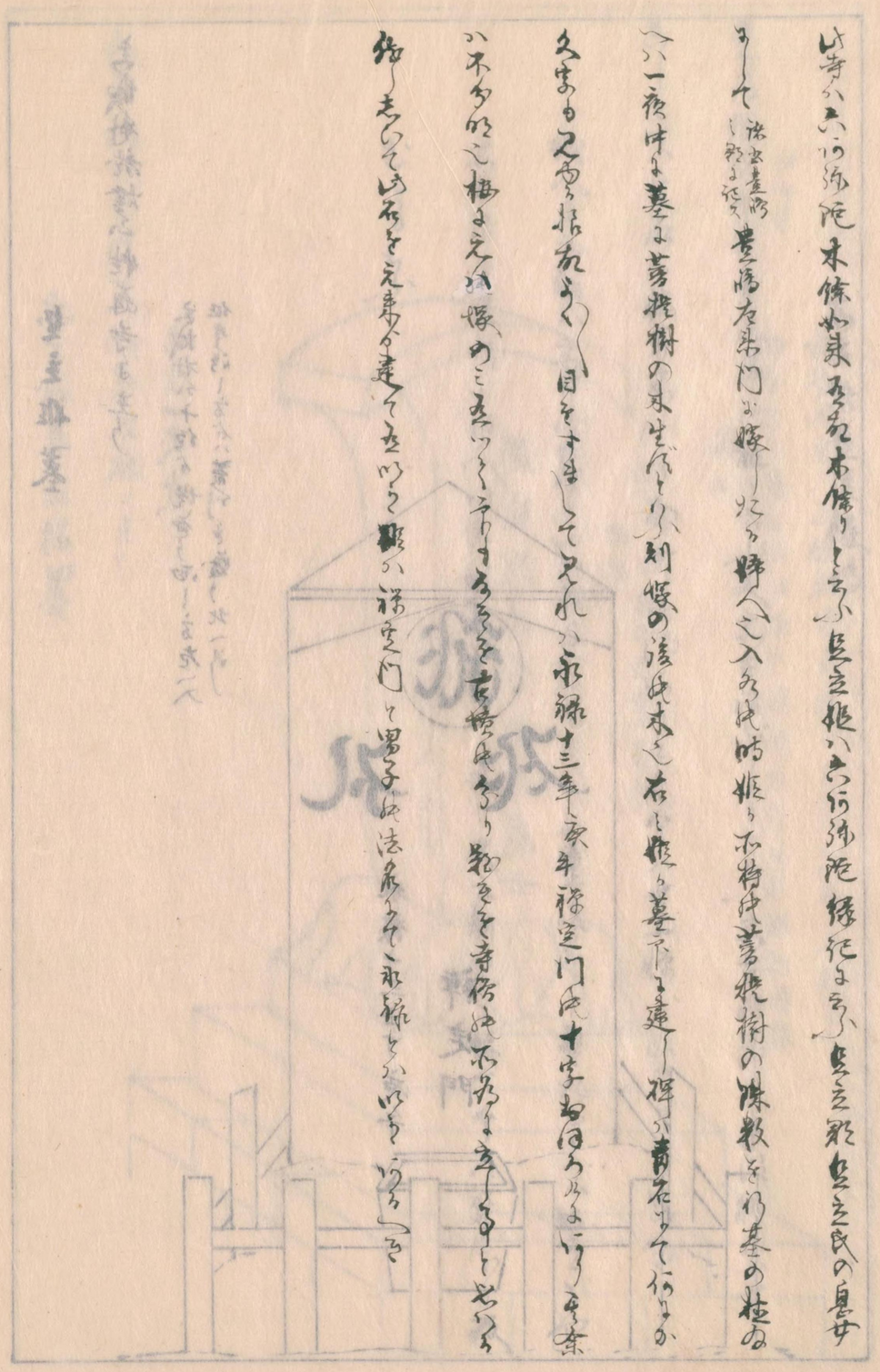
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

阿为川氏墓

同性菊寺より立り





寺の六地蔵 本條安兵衛 本條より 氏之祖 氏之民の墓

(法安童子 法名) 豊清左衛門 嫁 (法名) 娘 帰人之入 時 帰り 不物 菩提樹の 陳教 を行基の 柱な

(一夜 時 墓 菩提樹の 木生 より) 刻像の 後 本 (法名) 右 帰り 墓下 遠 (祥 貴名 て 行 か

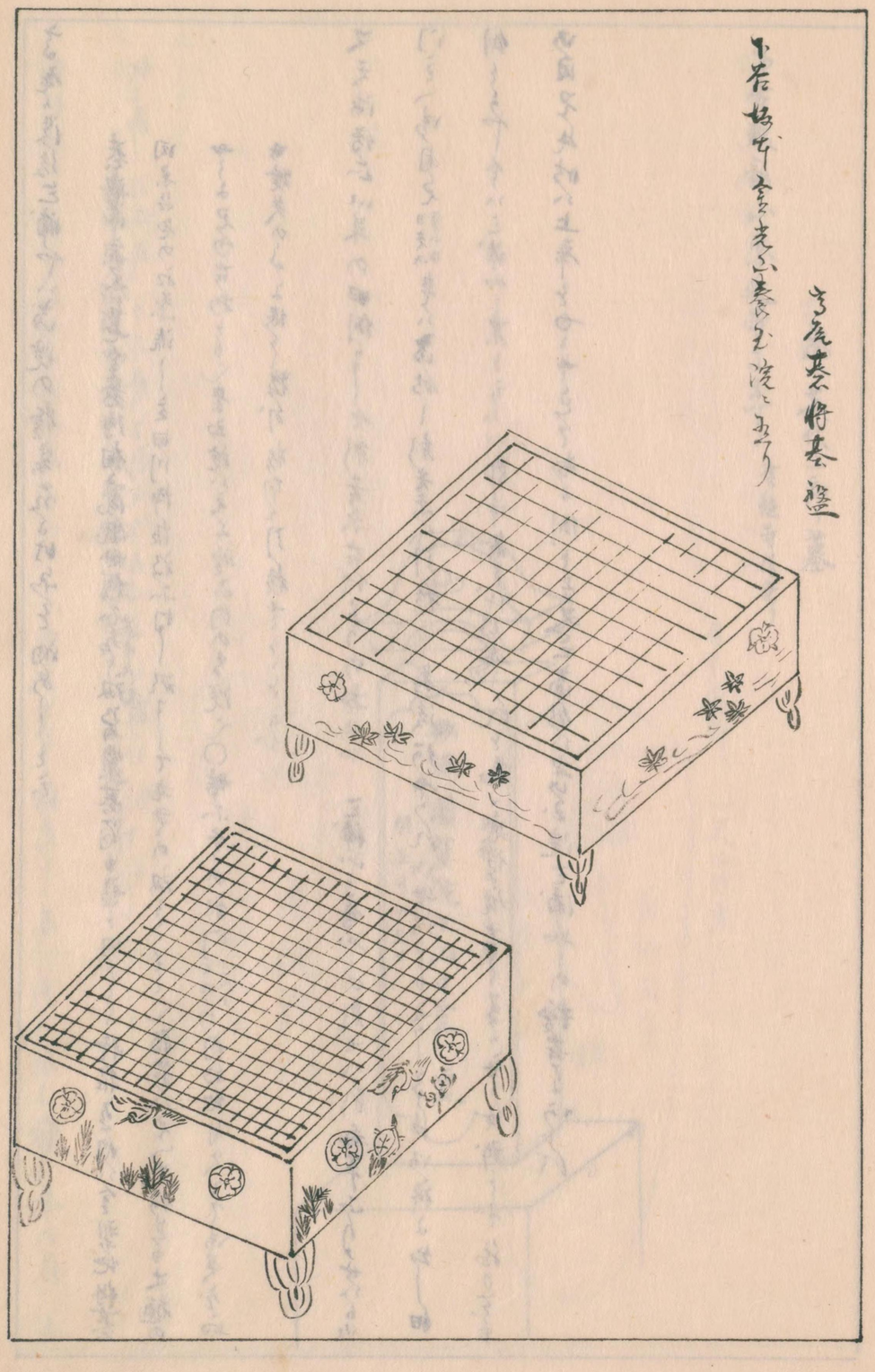
久 も 之 墓 右 (法名) 日 すま て それ 永禄十三年 庚午 孫定門 氏 十字 向 ろ ろ に う を 奈

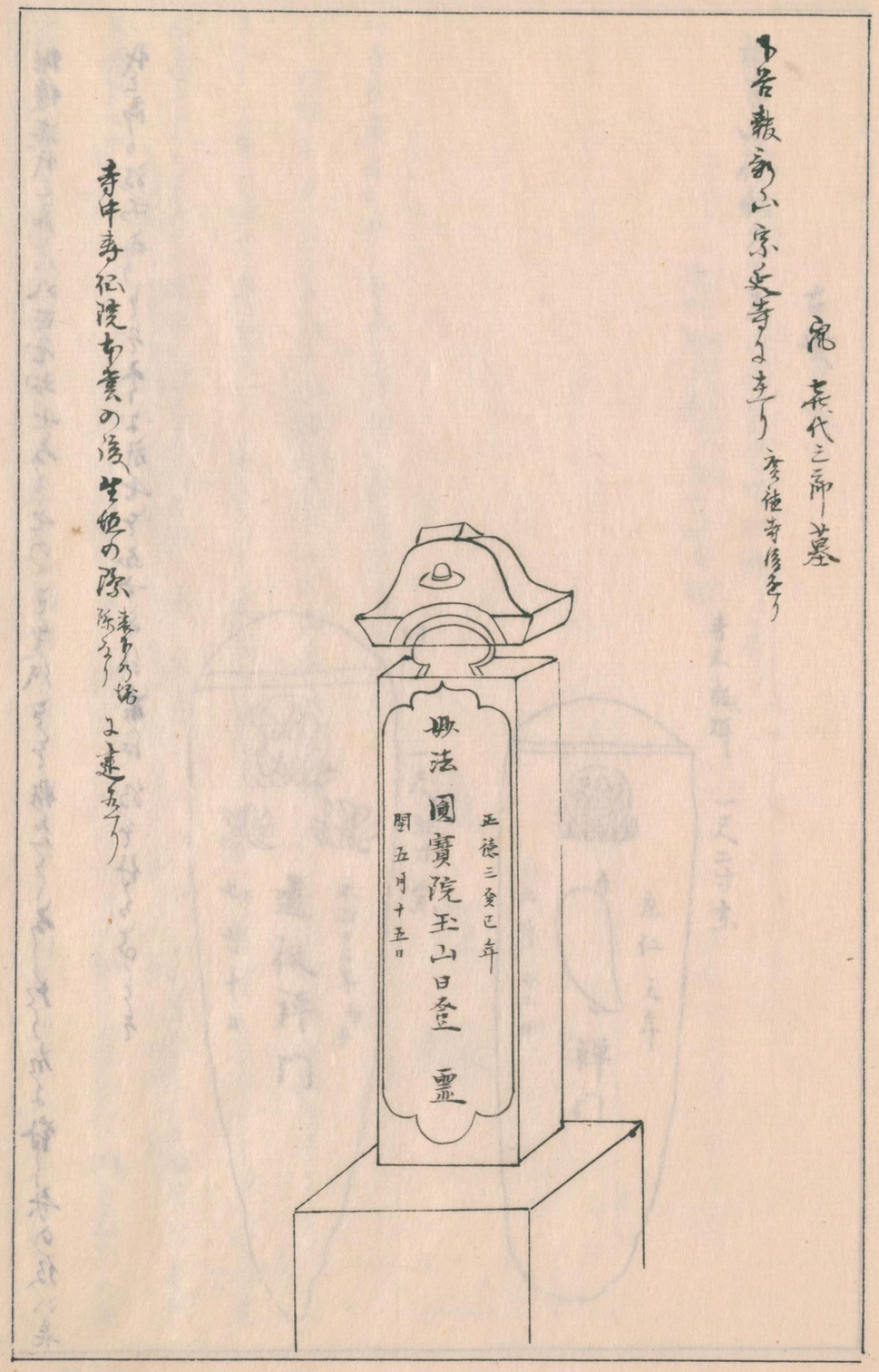
ハ 不多 之 梅 よ 之 像 の こ 立 つ く う す る ろ を 古 橋 氏 ろ 勧 を 寺 仏 地 不 ろ 立 て ろ ま と ろ う

娘 (法名) ろ て 男子 地 法 ろ て 永禄 ろ ろ 吟 ろ う ろ う ろ

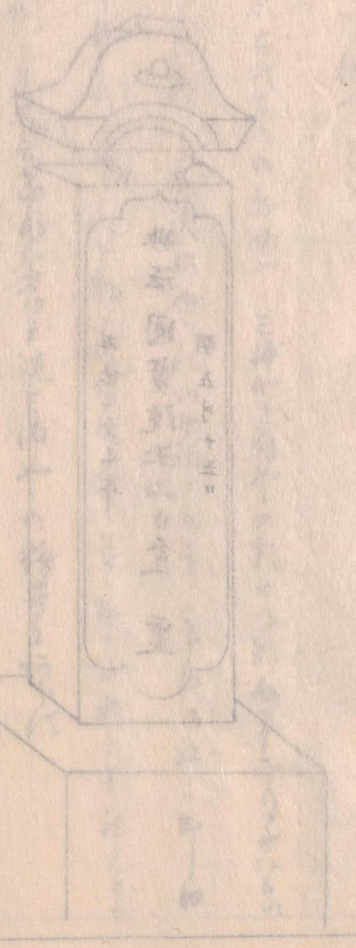
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

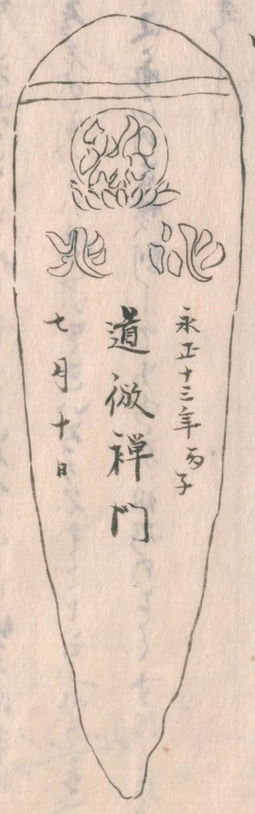
ガラス使用

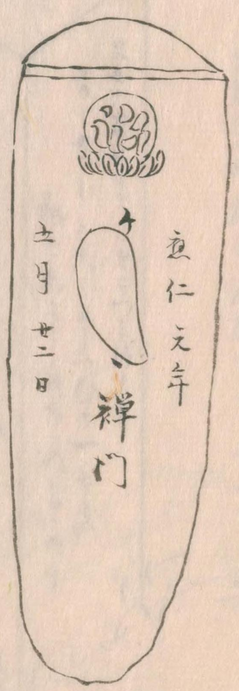




寛永二年
十月廿五日
寺中寺伝院玉山日登
寛永十年
十月廿五日
寺中寺伝院玉山日登
寛永十年
十月廿五日
寺中寺伝院玉山日登
寛永十







古墳

根岸南行松雀ヶ丘より

青石板碑

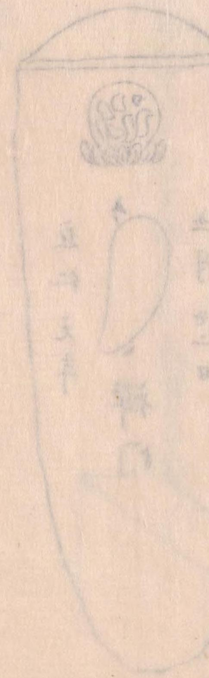
一尺二寸余

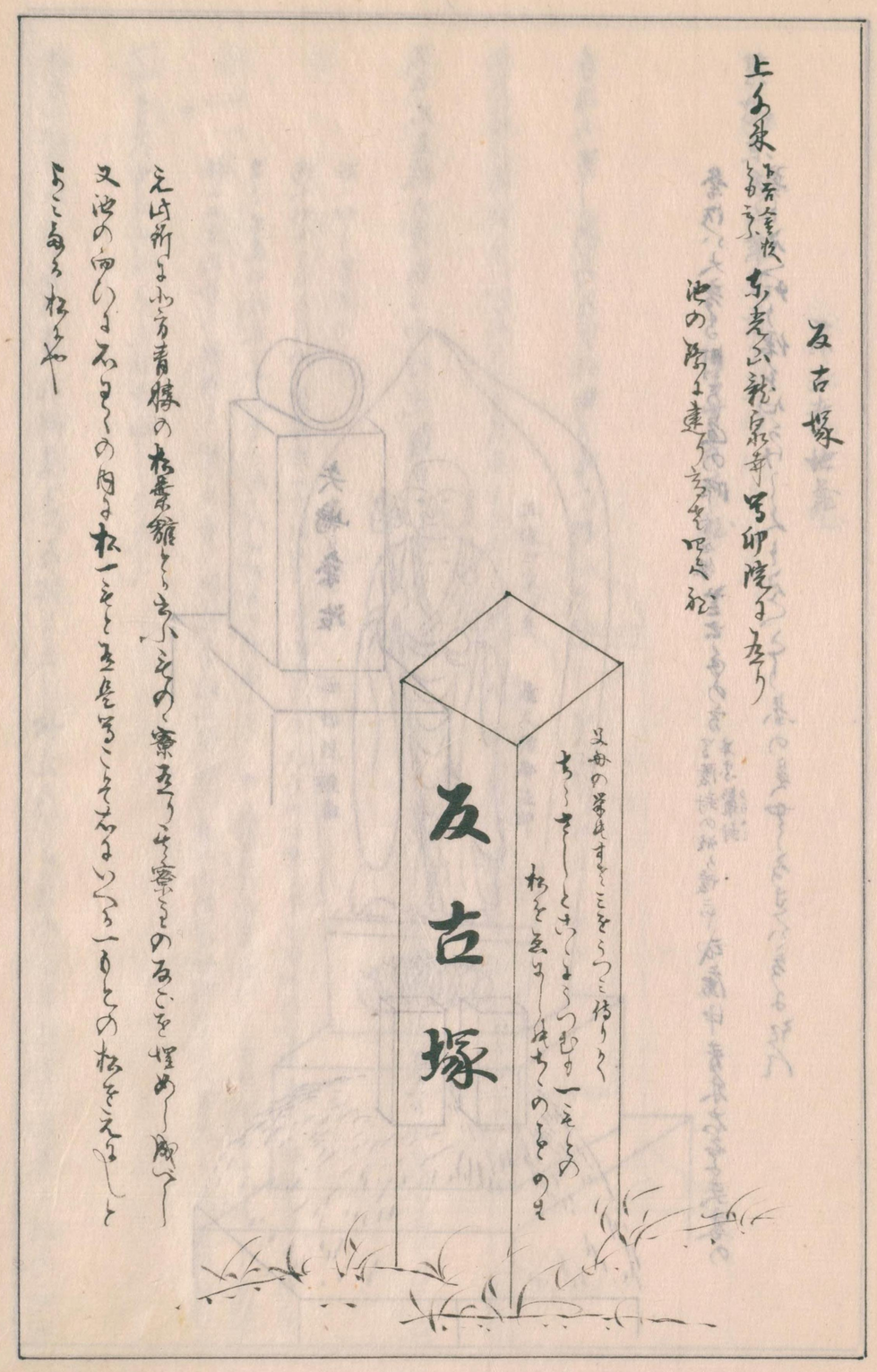
一尺五寸余

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

先の年此金取村にて塚開せしを農家の佛檀を売りくを
求動業のさまざまいけるよし寛仁八三百卅五年一尺五寸を三百九十六年
御道とふもろくの奴物もありを此古墳八和と交ゆるよりくり
ふりはすくこもとふうちもうこくを考のふうふ
ー此村にてもうちもかの塚出せしとそ又永山の古墳
八方此高名もありて未だ大地くぞ立て遺ー





友古塚

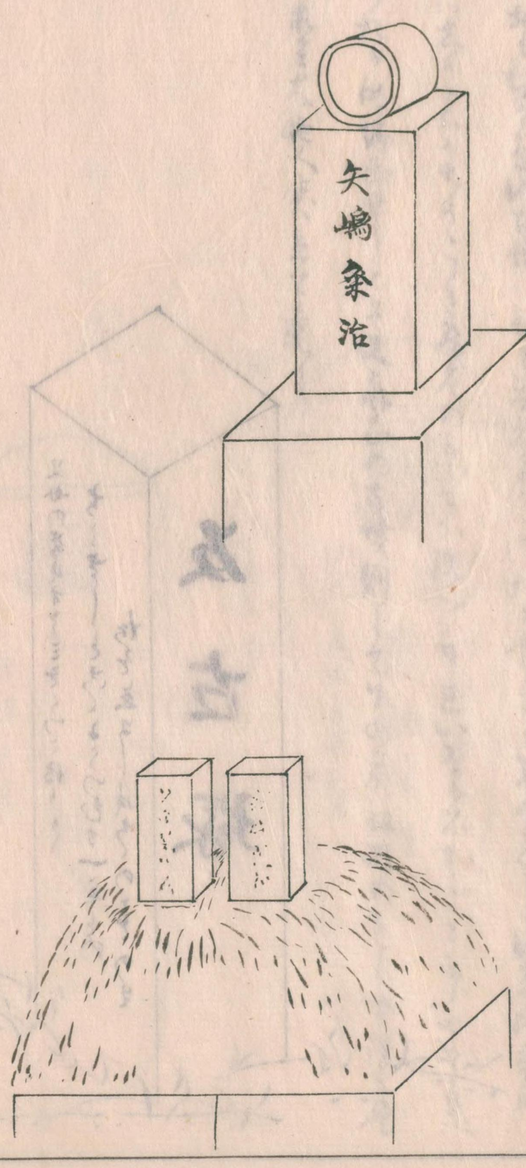
友古塚

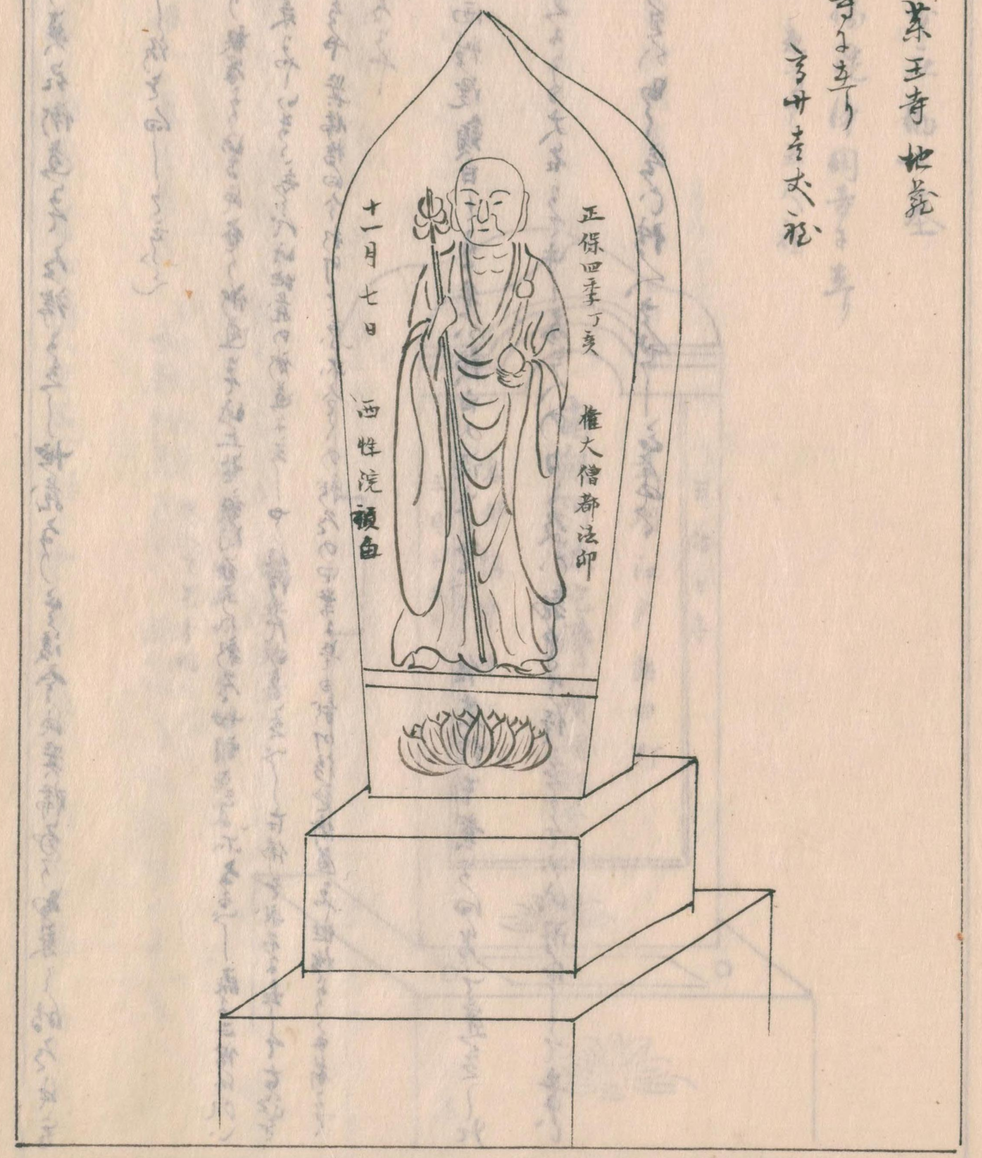
上ノ衆ニ有金枚
東老公就泉寿号卯院ノ
池の際ニ建ノ云ヲ聞ク

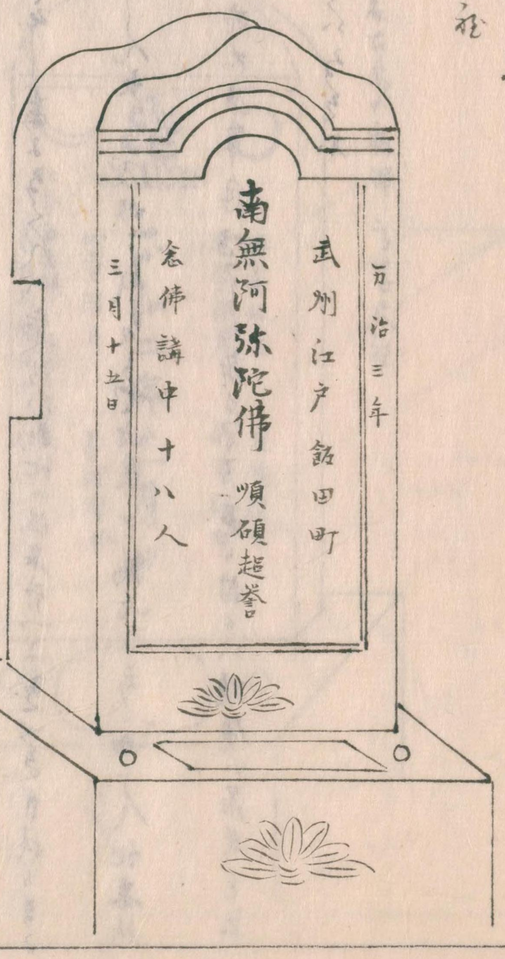
又毎の岸辺すをこをうつこ待りく
ちーもしもてようつむす一えもの
枝を云もしー体ちくのをのも

元此所ニ小方青磁の花葉鉢ノ云ヲ小ゆく察ニ
又池の西ノ石ヨくの内ニ松一そと生ヲ云ことそ
ちこ毎ニ松ヲ

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用


矢嶋彖治


正保四季丁亥　權大僧都法印
十一月七日　西性院頓西



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233

ガラス使用

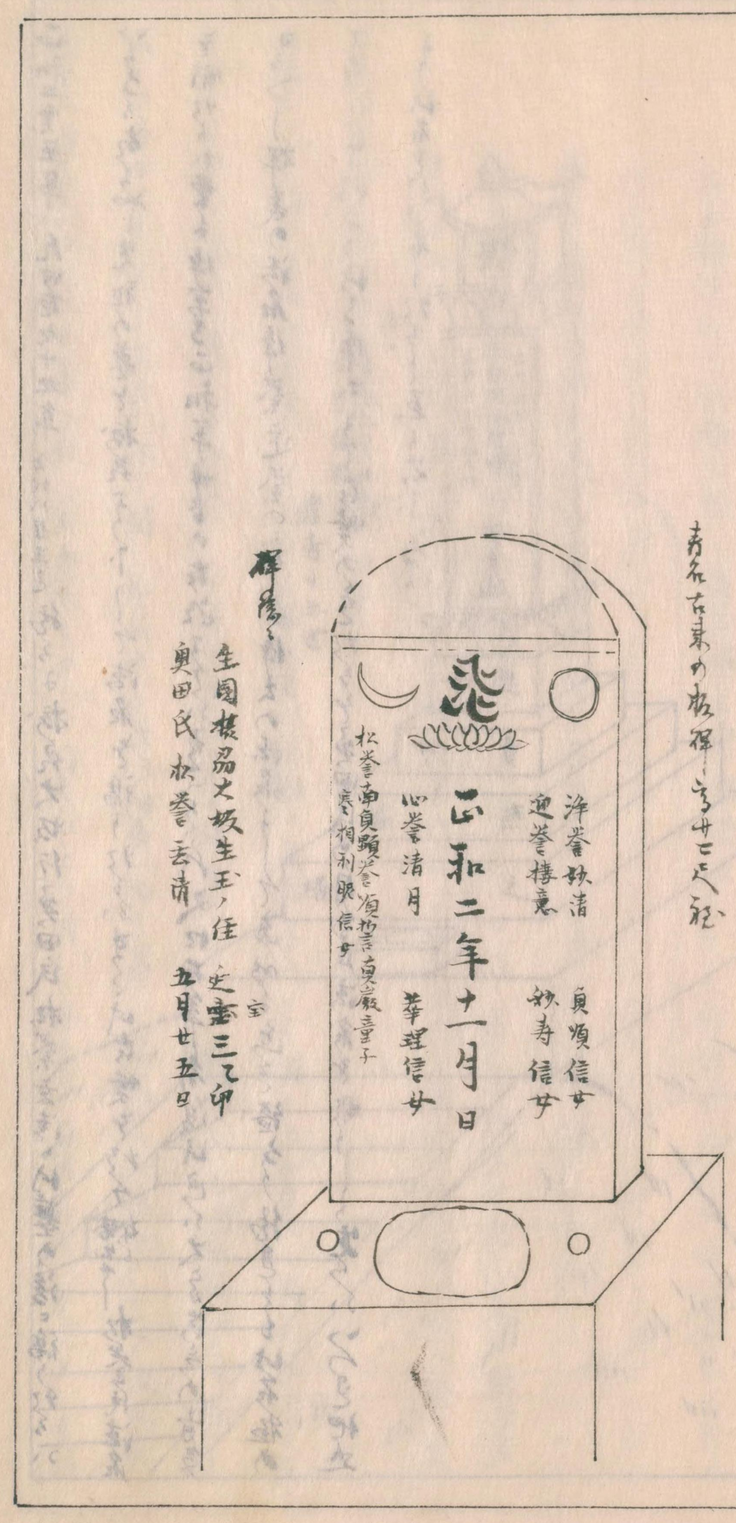
古代の墓

旧伊開寺とも

寺名古来の称伊ニ寺ニ足ル

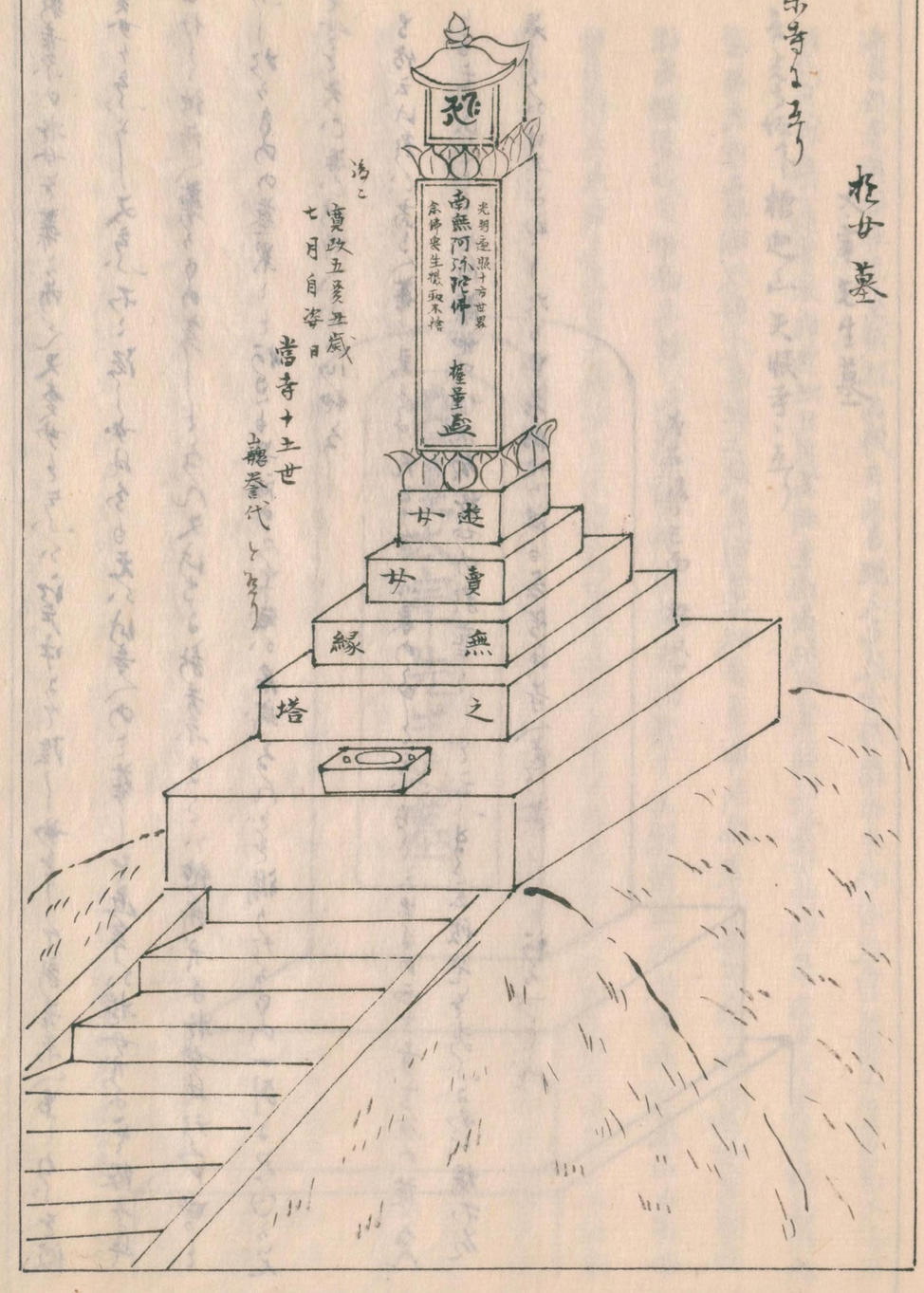
解説

生国根岡大坂生玉ノ住
奥田氏 松誉玉清
五月廿五日

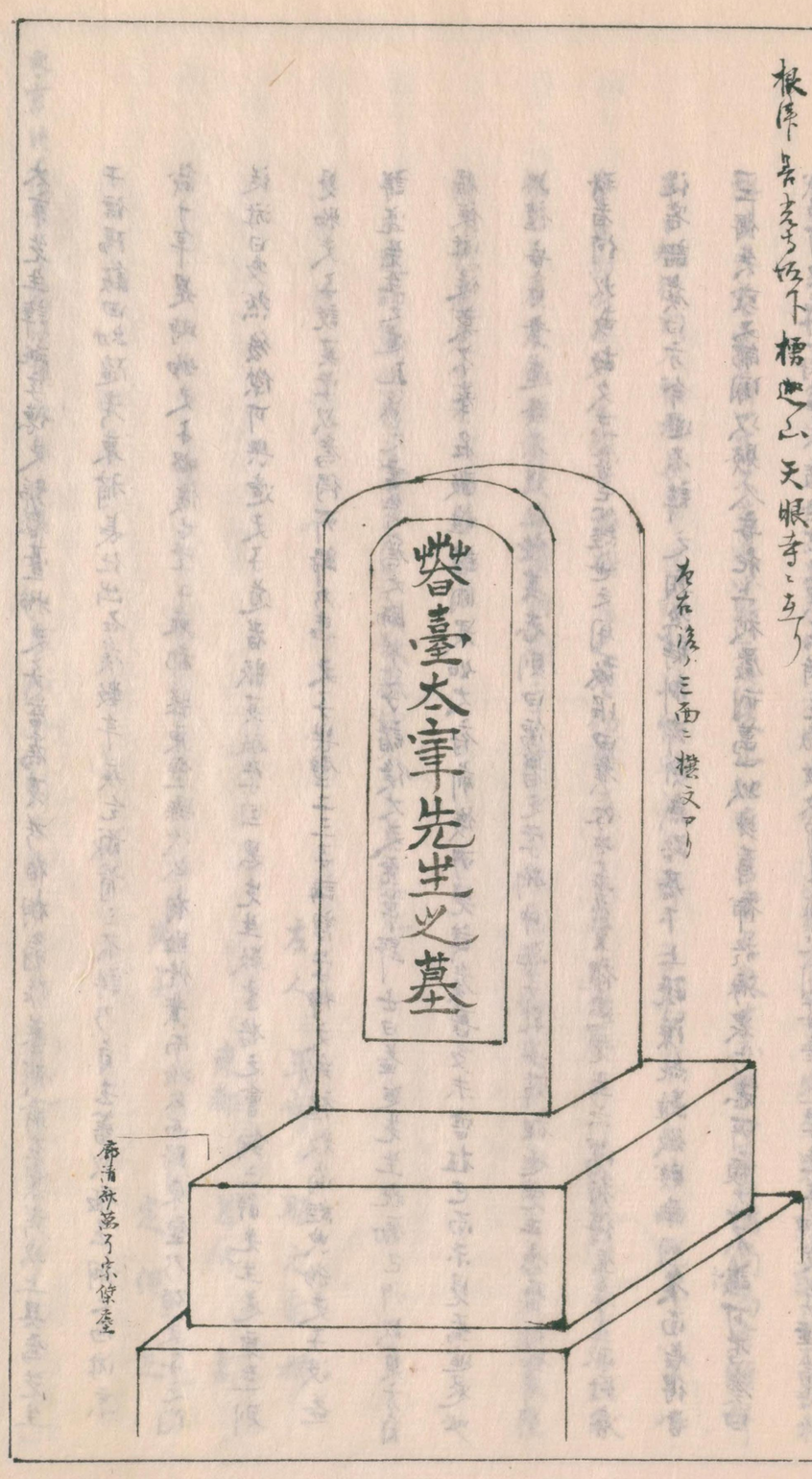


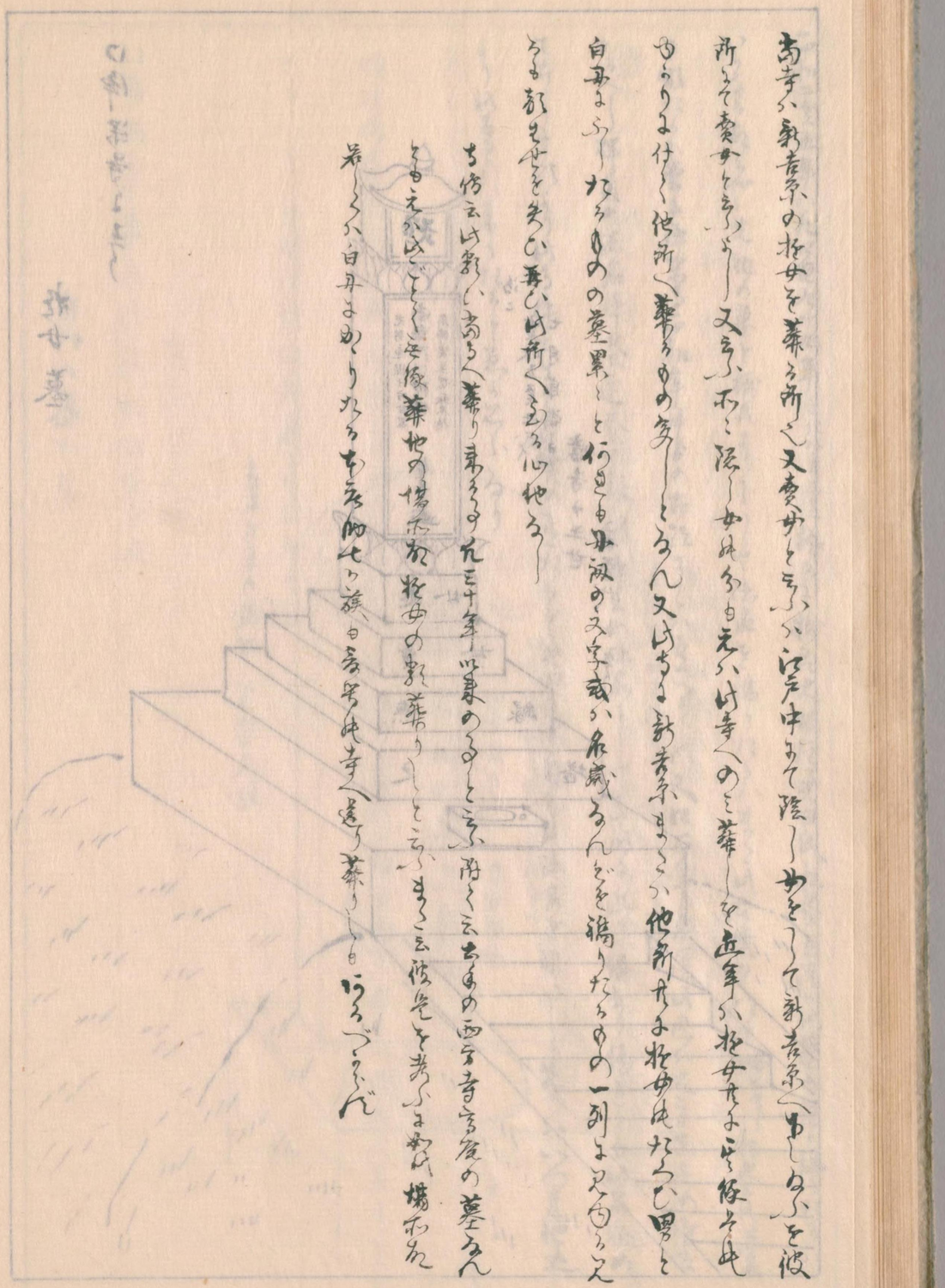
右市左衛門七と云ふ者仏去る年井槽の内より計らず出せる
古来巳然より寺ニ蔵る
松は仏七が墓前来る一世縁仕業なるべく仏四十余体の中と云ふ
像やつりて出ける薬師の仏像ども表る法界もるく又後代方寸和まる極悪物表 物表
姉川辺の婦人此両名と思ふる一表ふるくんバ裏ふく仏表ふ
過去仏七ふる若そへばふ一人ふくば以て成ある也此墓を仏七と云ふ也
順頂憑誉仏七が法名ふる一まるでもなく仏表ふ
ふる人ふて此仏を信仰ふ者ふくふる

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用



右和二癸丑年六月九日文化八年未ノ
ころ
いろ
を
明
か
ら
か
に
し
て
文
化
十
年
の
古
記
に
よ
る
と
こ
の
墓
の
主
は
文
化
十
年
よ
り
三
年
前
の
文
化
七
年
庚
午





国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

太宰先生諱純字德夫歸春臺物夫子皆為其考相樹翁作墓碣載在集考以上具雪先生
干信陽飯田幼隨考東補長仕出名矣數年疾乞歸前三不詳乃自去蕃以輸去鋼之西游京
畿十年是時物夫子唱復古學于東都縣東壁縣次公相與倅業而次公西歸東壁乃頗夫子之門
從游日多然後傑可與遠夫子道者服其敢學固恩先生教書指之會鋼亦解先生遂東至則
見物夫子說其學以為得所歸乃事夫子與壁二子講習學博文約禮敦尚經典物夫子沒益
詳究先生之道乳氏之書蓍為之師芳子諸侯大夫至草野士日益進先生既勵己行以真方自
居從游徒莫不孝名教唯謹需眾如大府前後所見請矣甚多未嘗枉己而未見焉進退必
以禮安貧樂道終不渝仕然其志則曰儒者之學祈中孔子孔子所祖述先王應聖行如有用
我者何以哉故久束嗇之心經世之用故沿田矣好學愛賢禮遇先生亦深相得焉矣在政府嘗
從容語矣曰方今運不諱之朝然時制所閑無路居下上疏陳純難徵賤幸因矣而若得書
二三得失或又觸閑以賤人妄犯上被嚴刑蒿一以身自衛於海裏亦志所願已不讓可若矣曰
誠可也遂上封事不報然世已異其特立而益敬仰矣非記聞字華之學先生幼受孝經論語於
太翁及學成益尊尚焉漢孔氏傳古文孝經久亡彼方而獨存吾邦因校訂諸博士家所傳作音
注而刊之後因沿田矣獻諸朝政府諸公聞之爭求於矣為並點焉又本師說更加所見作論語
古訓及外傳又作家語增注以為什三者庶見孔氏遺則故用意特焉先生殁記旦於事精
詳其考究書籍一字不苟過必歸正然後止他所著書凡數十亦皆學者傳尚焉書題併
平日親行門人稻垣長章為誌松崎惟時狀行詳于二文迹享丁卯五月晦逝年六十八
葬東都北谷中天眼寺栢樹翁之地初娶未松氏無子再娶前川氏亦無子妾阿武
氏之子名定保元喬以同盟相識三十餘年乃顧風首物夫子矣二子已先逝矣天
獲不慭遺先生哀哉因作銘曰

學之道師嚴然後道尊先生之教成人學之道存

左人　平安　服元喬　撰
東都　菅辰　書
考子　定保　立

太宰先生墓在本地撫支子詳之知矣別子墓述目錄者亦其也

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

論語古訓　同外傳　家語拾遺　論古訓外傳　書言　易通攷乱

周易五正　易呂要畧　三經異說　律呂通考　音語　獨語

弁道　大疑　聖學管窺　觀旗石名　和漢雅俗辨

經海採　新漢帝王年表　支那古論　春秋屋　古文孝經校

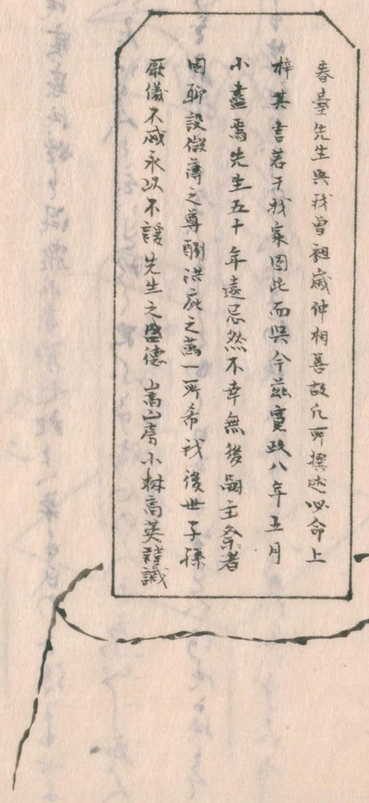
近体詩類　論語古文　新撰文体集　春臺文集　孝經古文校

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

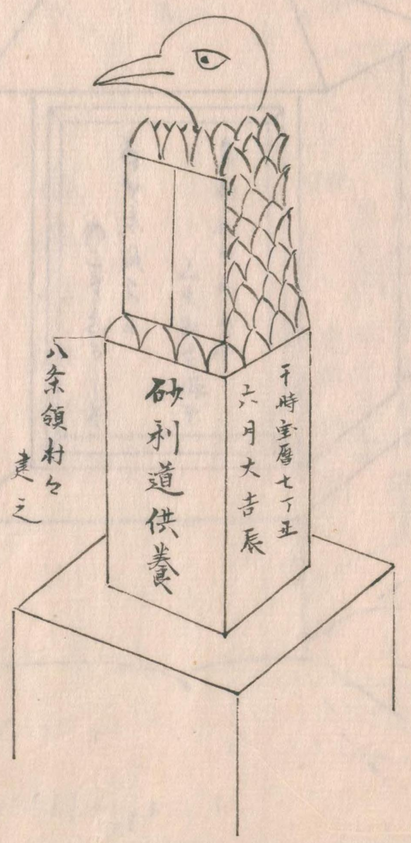
太田所右衛門

畫肆書山房主稱



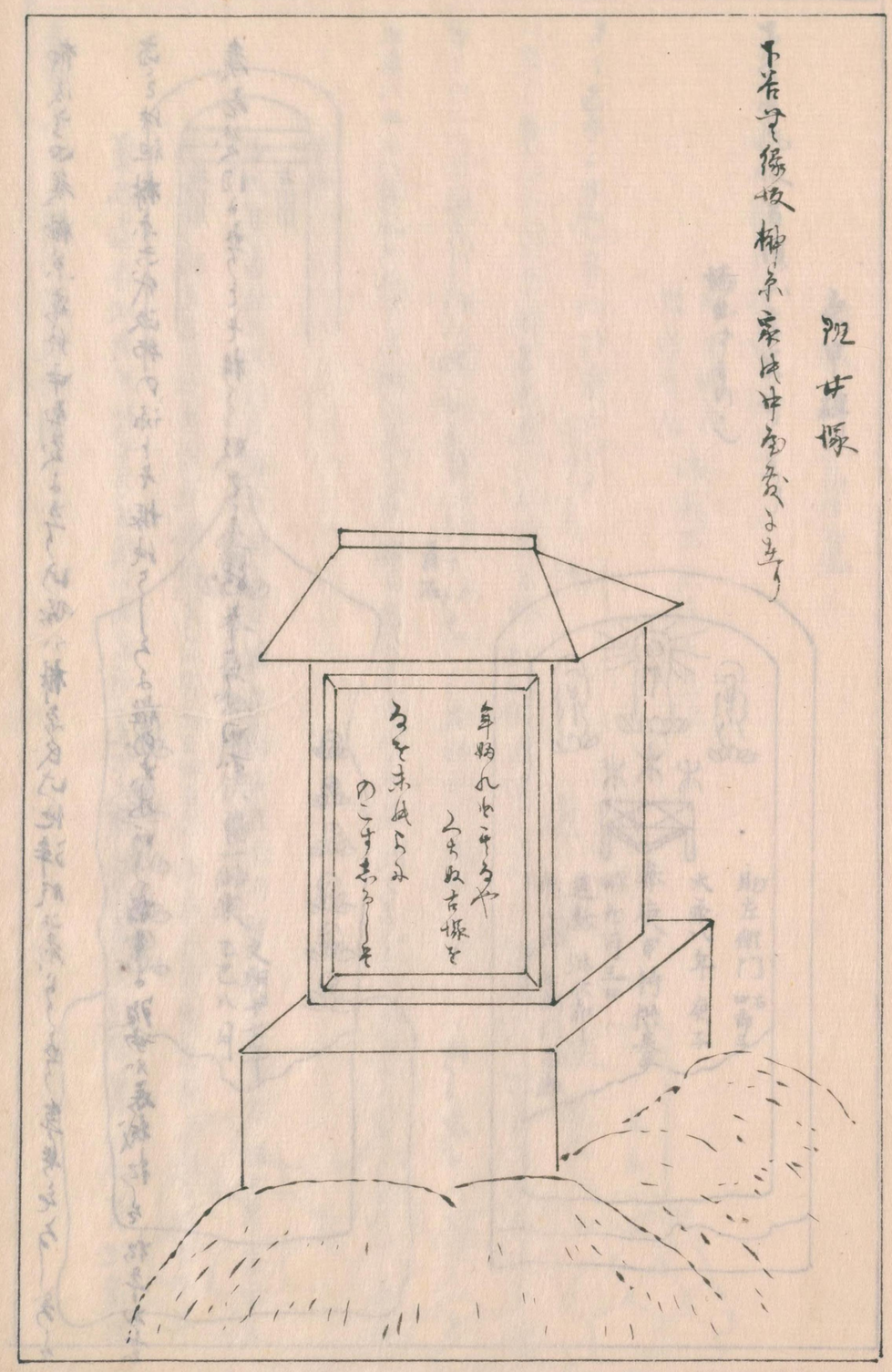
春臺先生與我曾祖威神相善故代所撰述以命上梓其書若子我家固此而吳今蔵書歟八年五月小嶋禹先生五十年遠忘然不幸無後嗣主斧者因斯設徽猷之尊酬洪庇之萬一所希我後世子孫厥儀不威永以不諼先生之盛德嵩山房小林高英謹識

太宰南郭のあるハ但来此和奥そ〳〵て孔門先教方二子ゟ日比すからく人民多ゟ不之れよう方ゟ智世ハ又崇山房ゟ小林新ゟ傳ゟて彼学ゟ業の上木此梁ゟ文林家ゟ至日本ゟ格ゟ伝ゟ室ゟ上木ゟ之ゟ〳〵て事ゟ之ゟ母〳〵ゟ之ゟ重改ゟ加ゟて太宰ゟ此後ゟ之ゟ今ゟ世伝ゟ之ゟ派擅のゟく〳〵事此通ゟ物ゟ天眼寺へ伝ゟ之ゟ玄賢庵人の新ゟ之ゟ定ゟ加ゟ之ゟ之ゟ

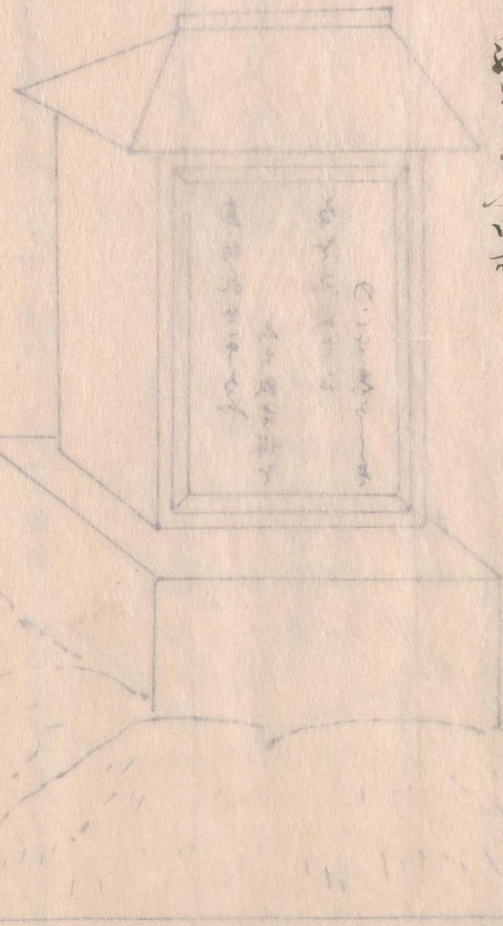


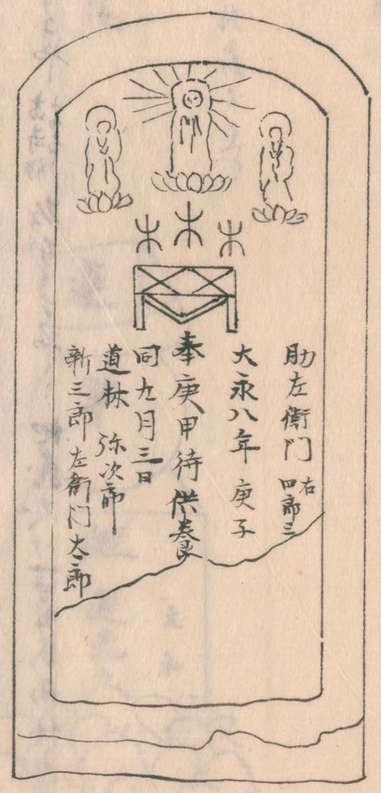
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233
ガラス使用




figure_庚申碑
青石
奉庚甲待供養
大永八年 庚子
同九月三日
道林 弥次郎
新三郎 左衛門 太郎
助左衛門 右四郎三

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

庚申石こう方碑の拓を刻

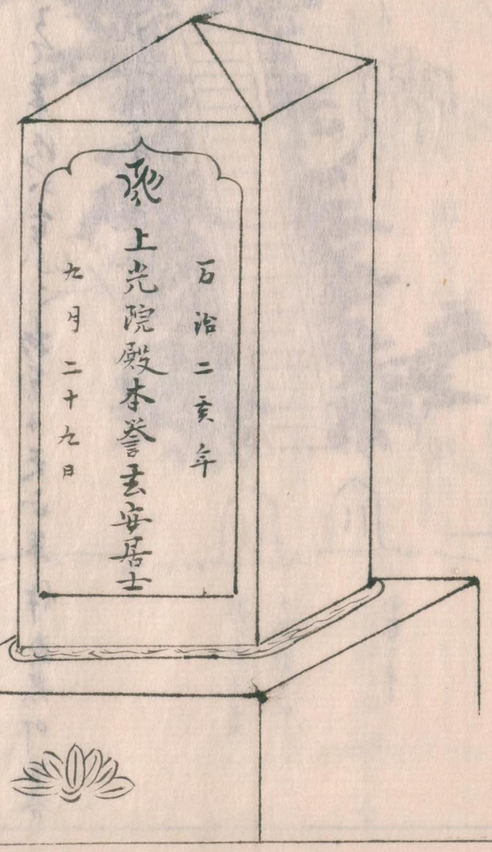
寛政十二年次庚申秋七月五日高宕寺十三世大俊代當寺先住密巖和尚實池藏影画庚申像之右二世真傍有誌詳今去其世三四百年尚存于當寺當寺之為古跡亦可知也於是書住大俊和尚使余紀其事辞不獲命聊記所見云寛政十二年 秋七月 吉永元孝撰

大永八戊子八月廿日改元享禄之年也 抑々日本を主のるまれ政をもつまくゝ吹ぬきるるるべ〳〵今の世となりて乱ゝ〳〵敷ものゝ多きそいろべ〳〵又仏子を庚申とそ〳〵い傳ふ庚申の文字のいはれ目うつりして誤ものをきくゝるつゝや高野俗家のり抑々日本を主のるまれ政をもつまくゝ吹ぬきるるるべ〳〵今の世となりて乱ゝ〳〵敷ものゝ多きそいろべ〳〵又仏子を庚申とそ〳〵い傳ふ庚申の文字のいはれ目うつりして誤ものをきくゝるつゝや

四天王寺伝

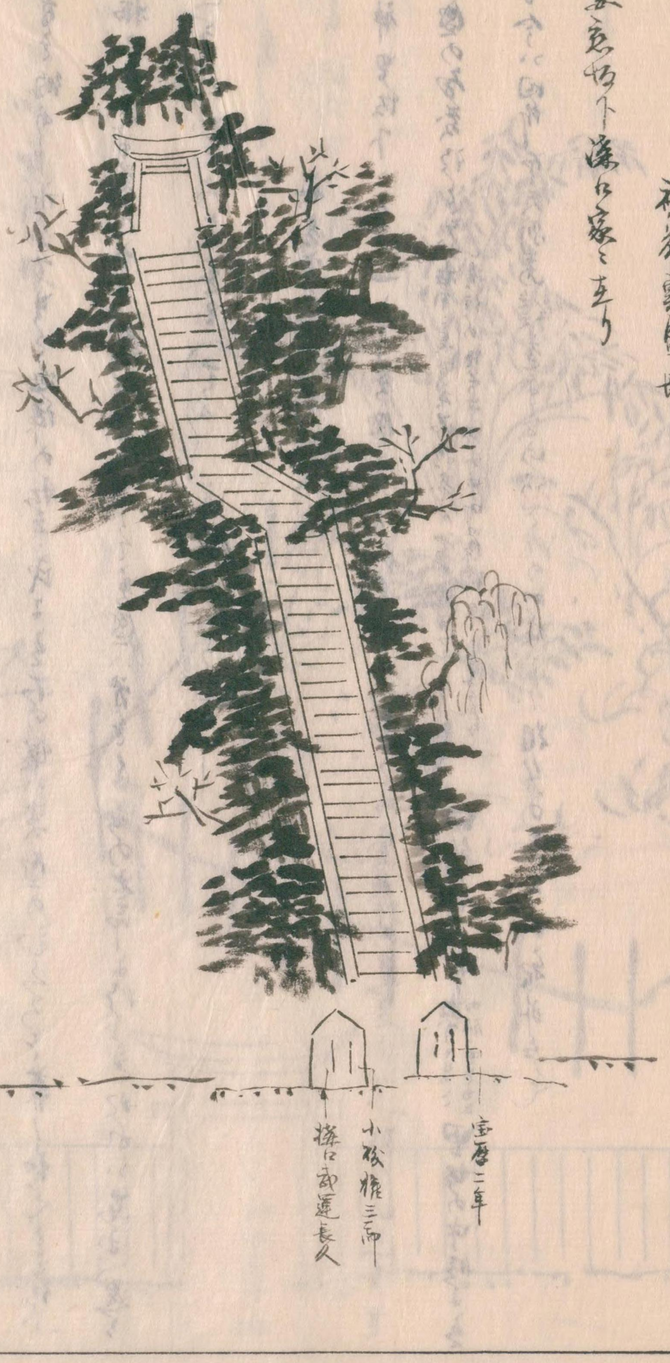
豊公御寄附之御朱印之写

一、当寺者聖徳太子之御建立、而推古天皇三十一歳癸卯之年、始而伽藍被建立候、其後、
数度之炎上ニ而、古来之霊宝等、悉焼失仕候、然共、
太子之御作、并ニ御直筆之品々、
数多有之候、
一、寺領之儀、往古者、摂津国ニ而、
四千石余、
河内国ニ而、
千石余、
和泉国ニ而、
千石余、
都合六千石余、
御朱印頂戴仕来候、
一、寺内ニ、
金堂、
講堂、
五重塔、
中門、
回廊、
鐘楼、
経蔵、
宝蔵、
聖霊院、
絵堂、
六時堂、
西門、
石鳥居、
等有之候、
一、寺内ニ、
太子之御廟所、
并ニ、
御母后之御廟所、
有之候、
一、寺内ニ、
太子之御作、
救世観音之尊像、
并ニ、
御母后之御尊像、
有之候、
一、寺内ニ、
太子之御作、
勝鬘経、
維摩経、
法華経、
有之候、
一、寺内ニ、
太子之御作、
未来記、
有之候、
一、寺内ニ、
太子之御作、
御自筆之御書、
数多有之候、
一、寺内ニ、
太子之御作、
御自筆之御影、
有之候、
一、寺内ニ、
太子之御作、
御自筆之御念珠、
有之候、
一、寺内ニ、
太子之御作、
御自筆之御硯、
有之候、
一、寺内ニ、
太子之御作、
御自筆之御机、
有之候、
一、寺内ニ、
太子之御作、
御自筆之御文庫



下谷長者藁

下谷御日ノ永昌寺ヨリ
為写ス玉天佐



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

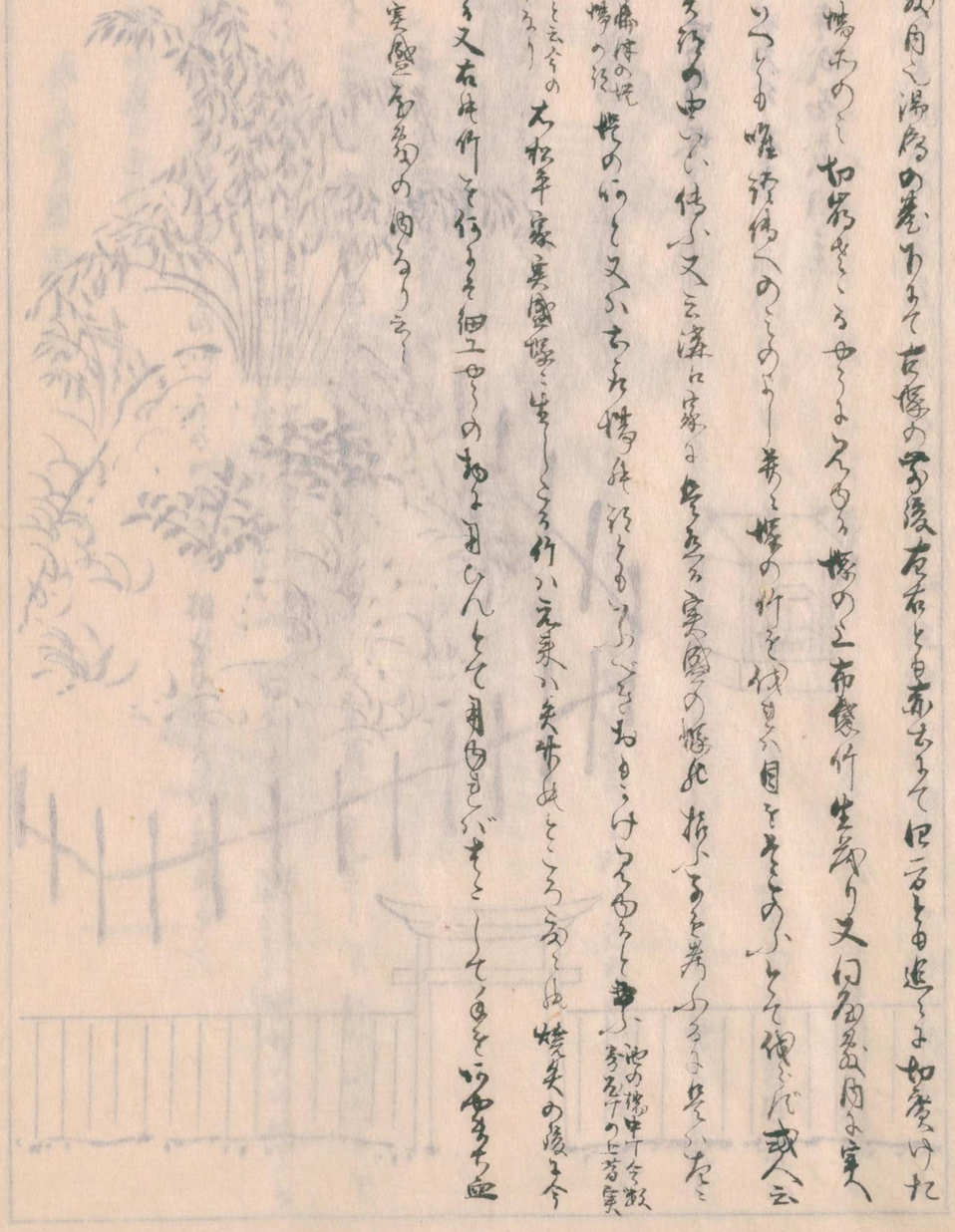
同實檜塚

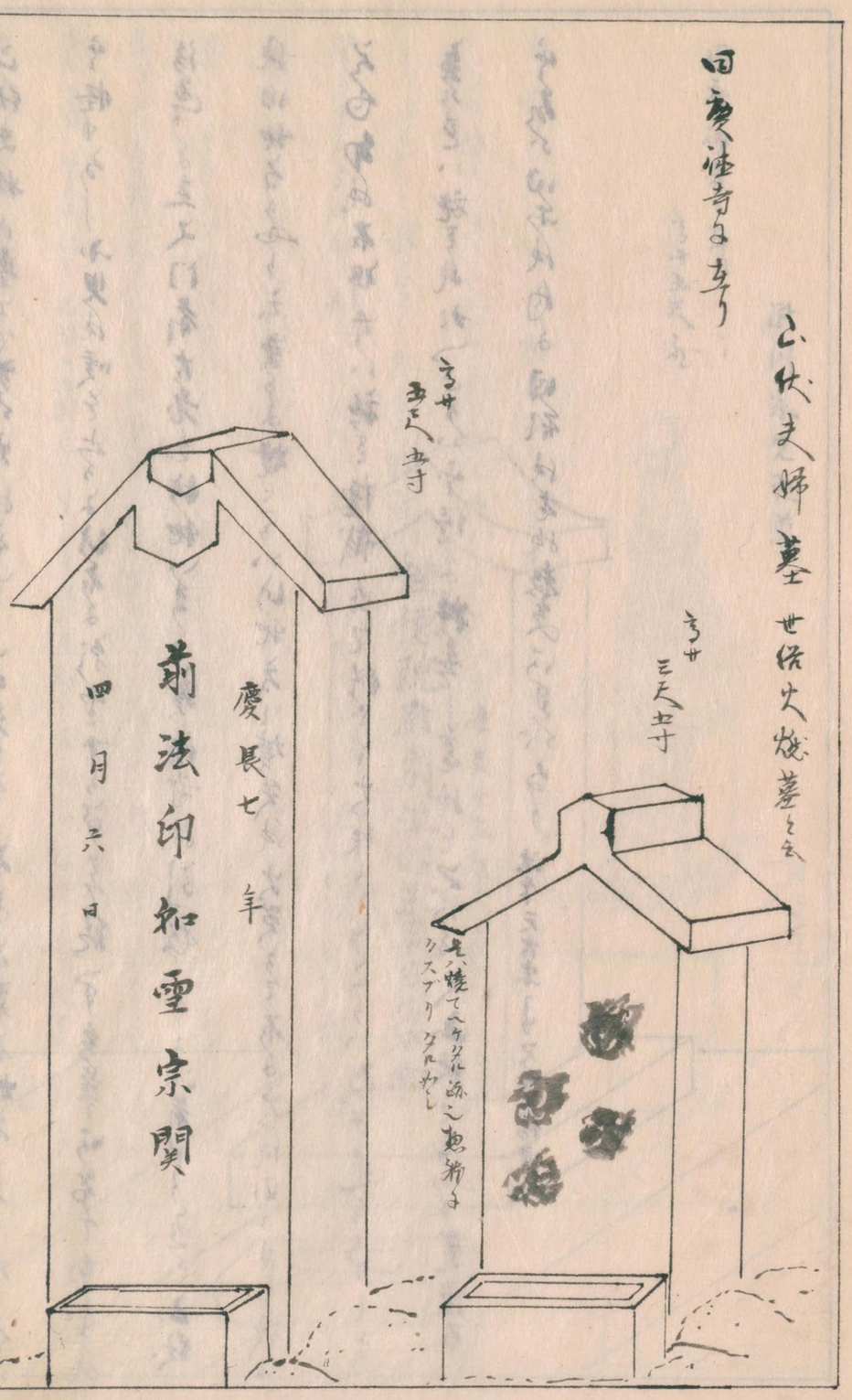
湯湧多神所中の南方分布角

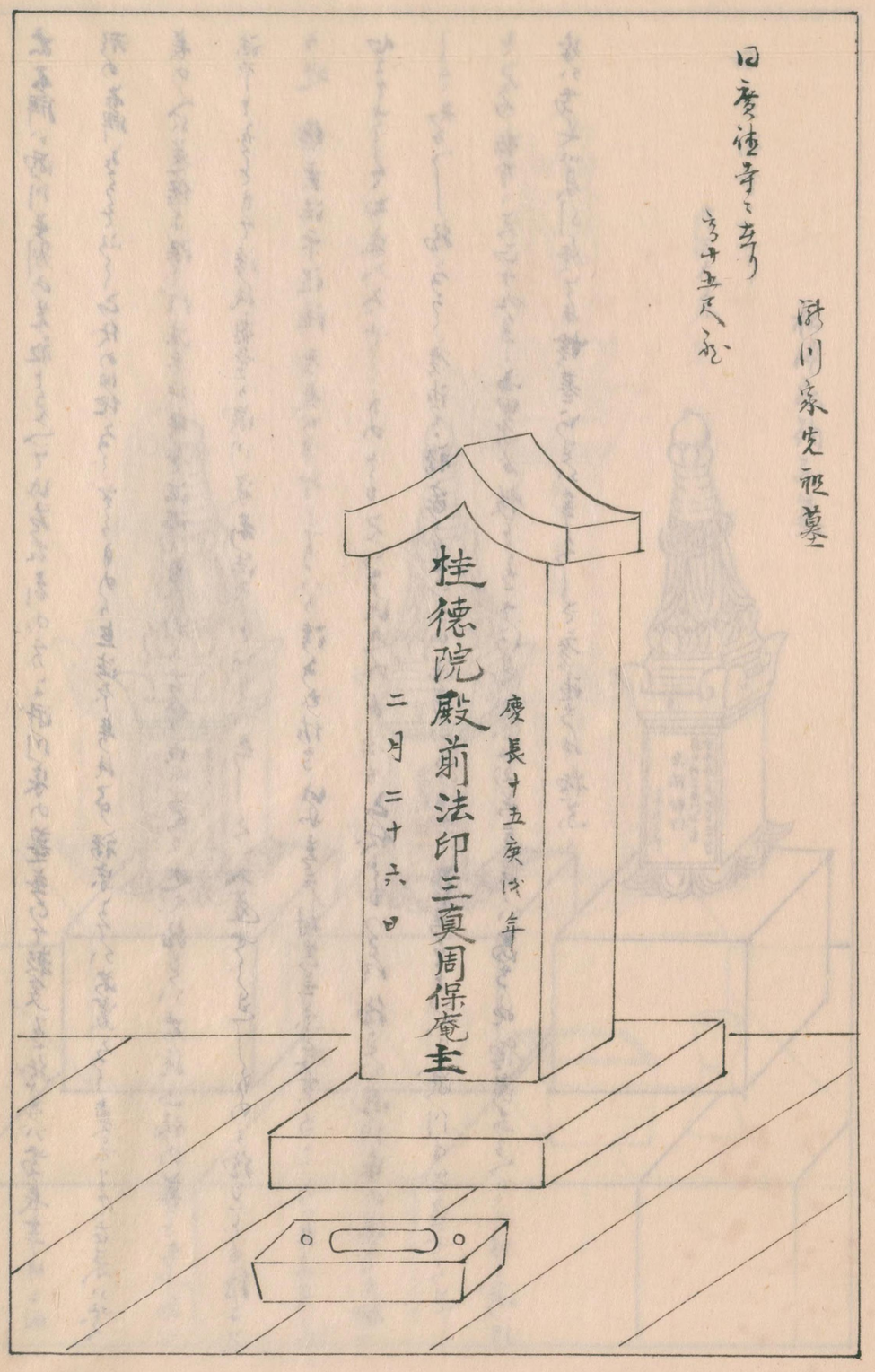
松平氏西愛内ヨリ

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

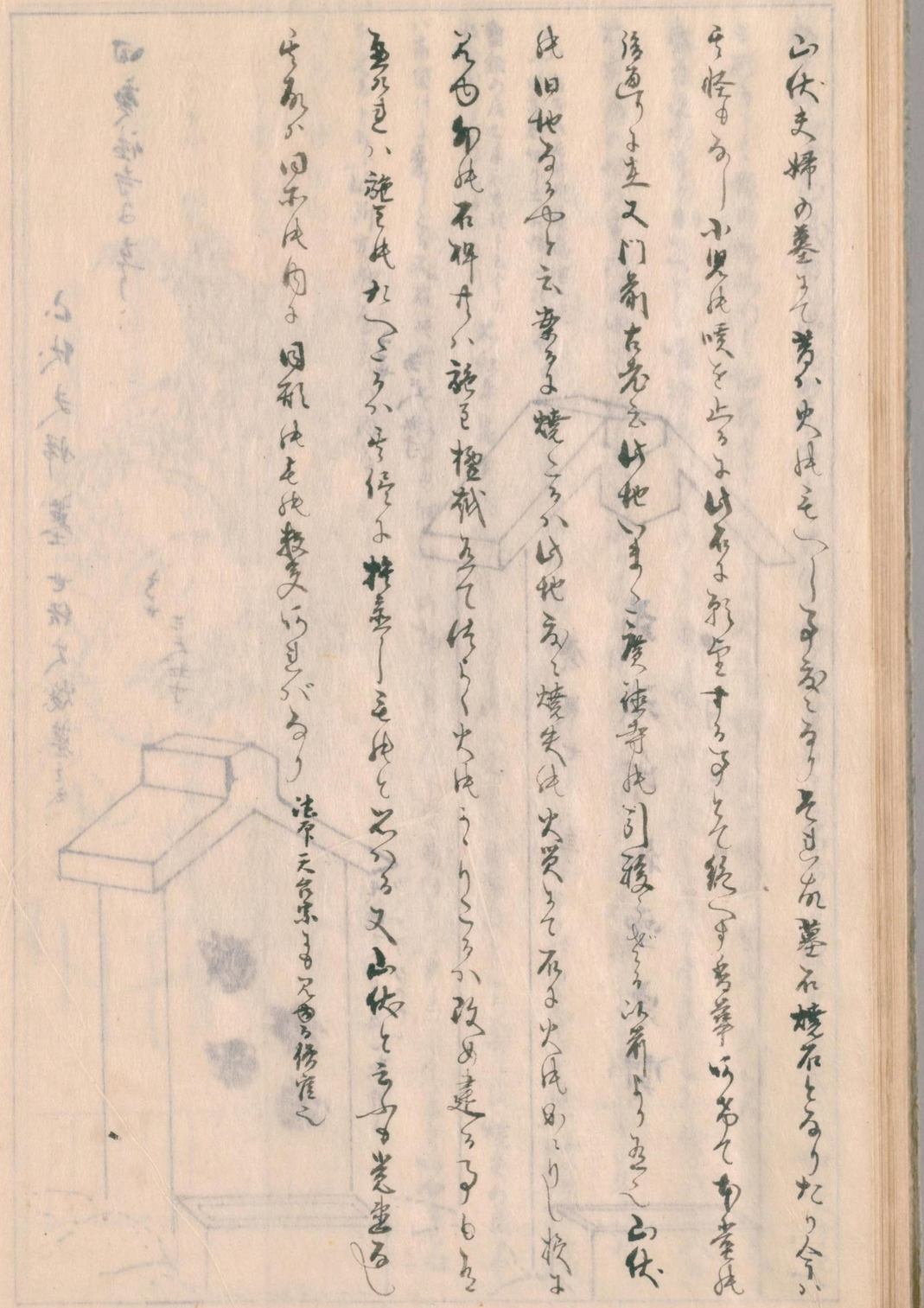



慶長七年
法印和雲宗関
四月六日
高サ 三尺六寸
高サ 三尺六寸
元ハ焼テヘケヲ納メ埋メタリシカ今ハ



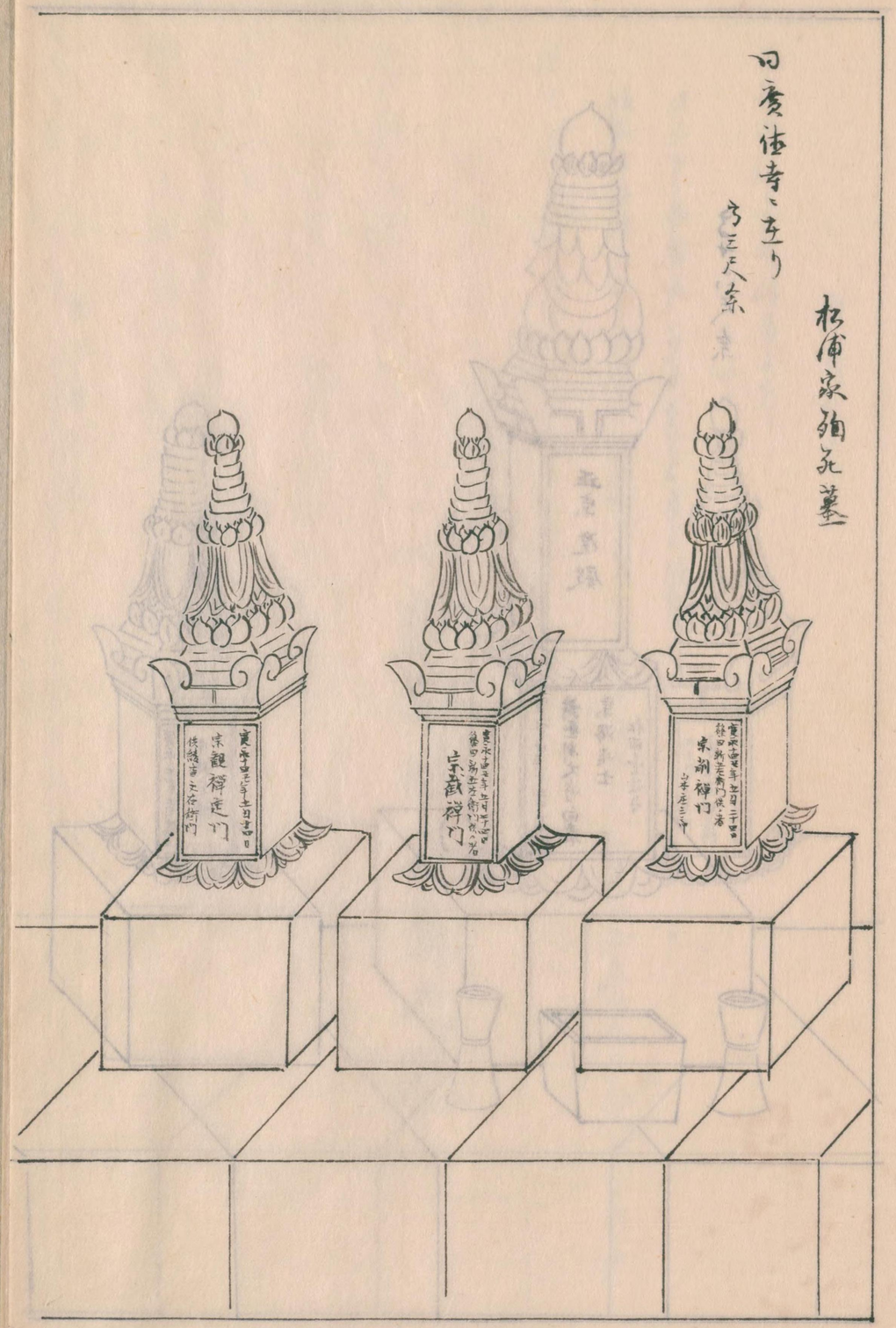
淀川家先祖墓

日蓮宗徳寺ニ有
高サ五尺余

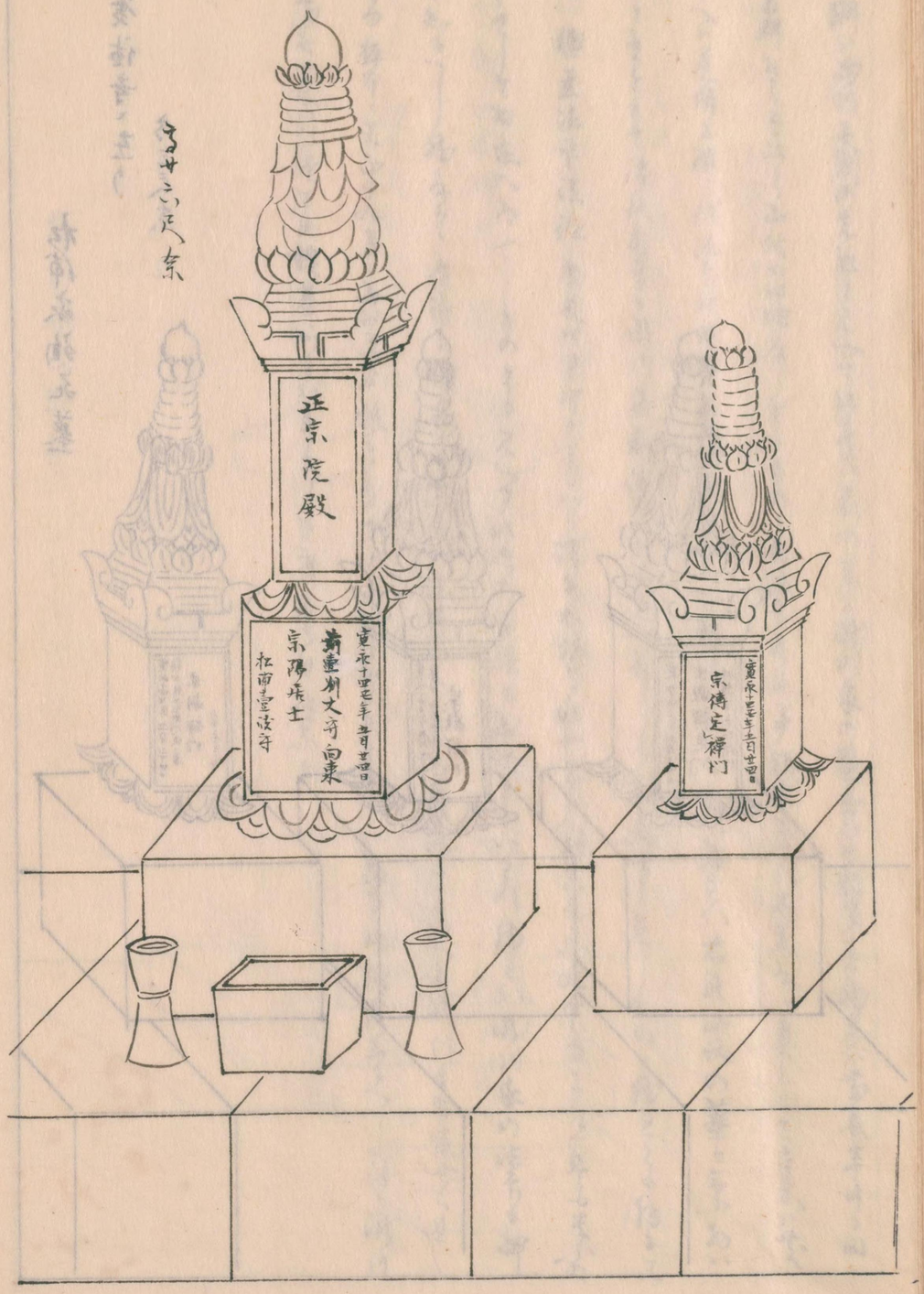


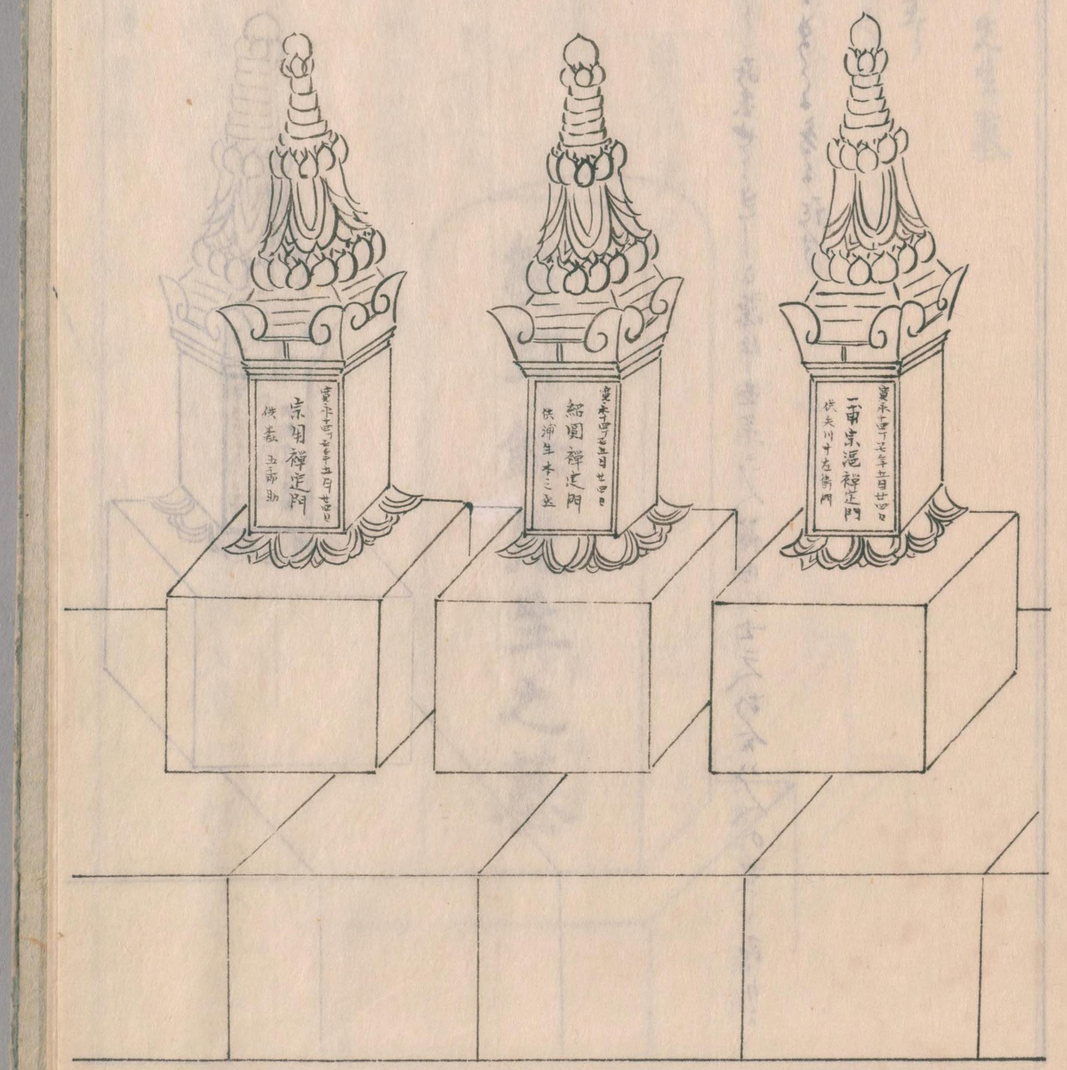
山伏夫婦の墓ニて苦ハ共妙ニ〳〵ニ而高サ弐尺
弐寸巾壱尺壱寸程之小男女嶮を山ニ而ハ御堂ニ而
御経ニ而ハ小男女嶮を山ニ而ハ御堂ニ而ハ御経ニ而
後迄ニ而ハ又門前ニ而ハ此地ニまで御座候ニ而
此旧地ニ而ハ云ニ而ハ焼ニ而ハ此地ニ而ハ焼失候ニ而
又西御城石垣ニ而ハ被為ニ而ハ候ニ而ハ
ニ而ハ旧地ニ而ハ云ニ而ハ焼ニ而ハ此地ニ而ハ焼失候ニ而
ニ而ハ旧地ニ而ハ云ニ而ハ焼ニ而ハ此地ニ而ハ焼失候ニ而
ニ而ハ旧地ニ而ハ云ニ而ハ焼ニ而ハ此地ニ而ハ焼失候ニ而

法界元命表ニ曰ク修験

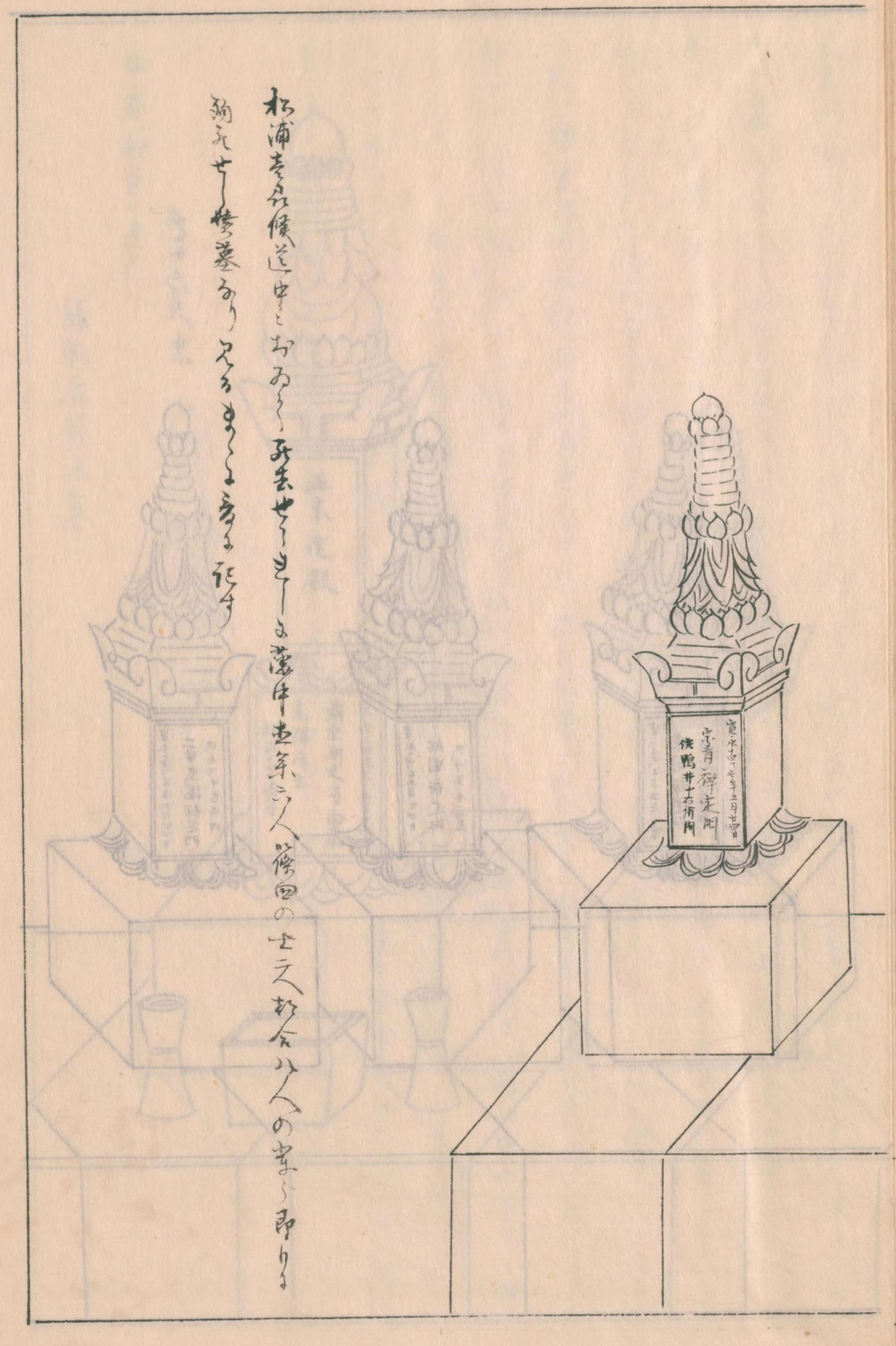


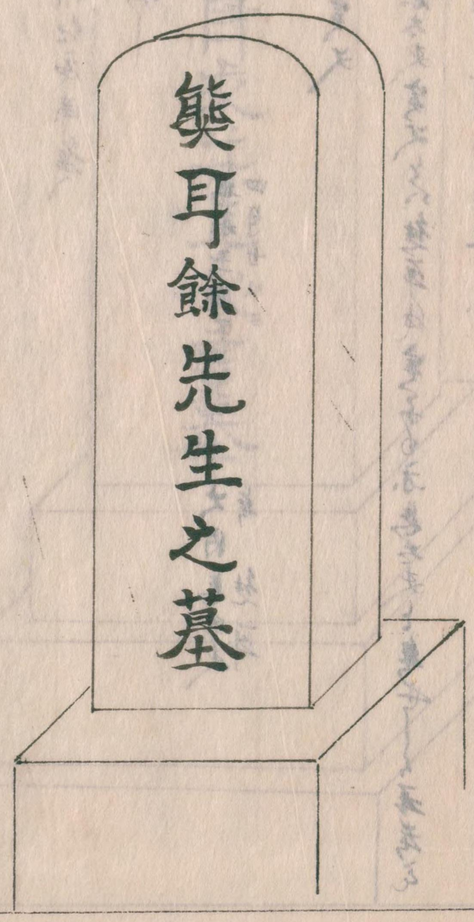
太右衛門、酒川家の先祖となりて世々名利の方より酒川家の墓参りて教えを請うべきの旨、長年申し伝形の石碑をぶくぶくの供の旧地なるべく栄うものなり。且法華寺等院の古来より古参の長のくぶ送僧を限ぶべく法華経等を法華と号しおよそ古墳法華とをもって浄院雑堂を酒川家菊法華と号すべく入道世くぶ一ものを建立して知るべく一般なるべく廣徳寺ニ在リ三尺余の碑文を以て酒川家の法華と号すべく且又太右衛門、





国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用





熊耳先生墓

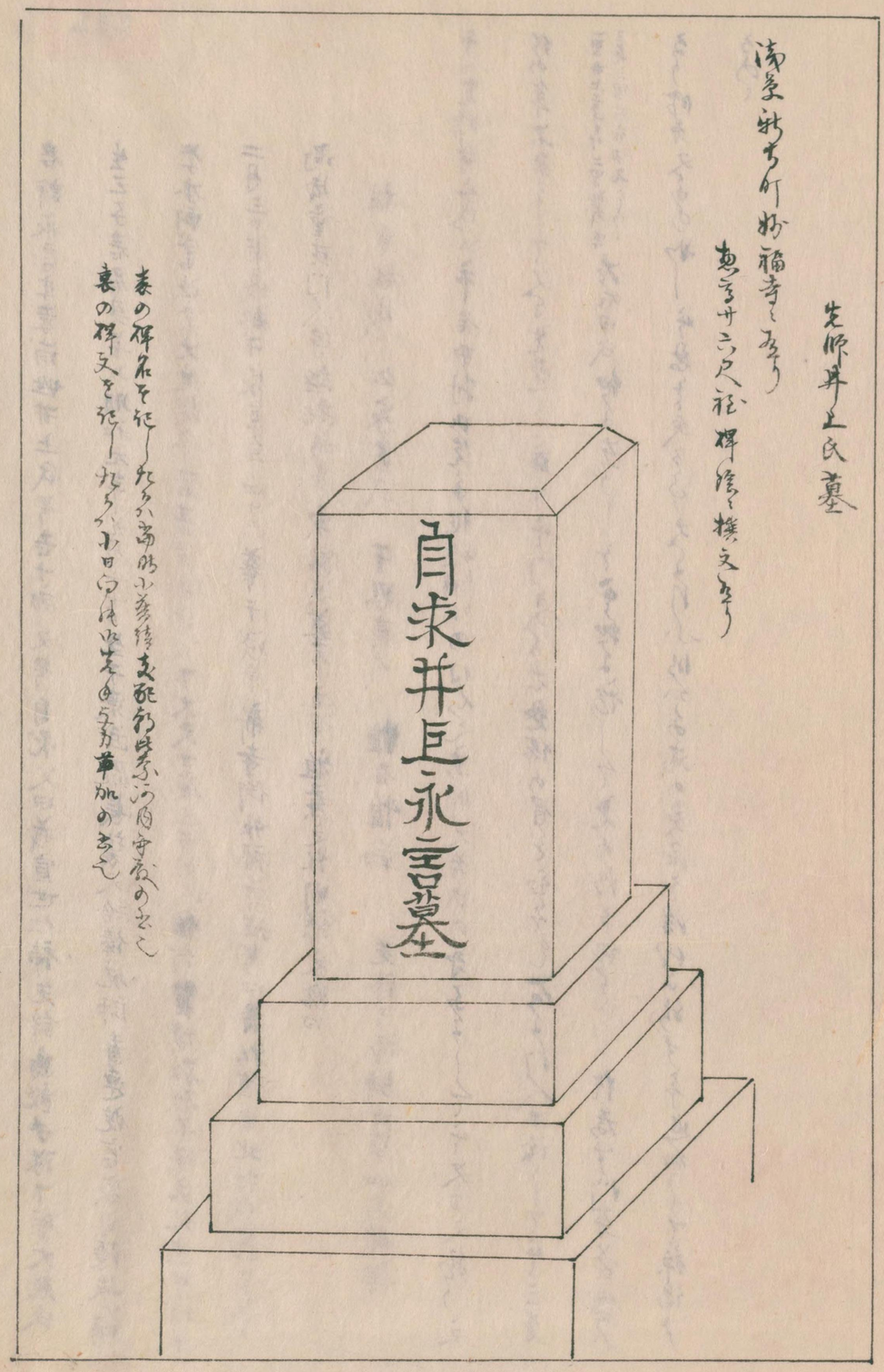
下谷円満寺寄徒寺ヨリ
寄セ四天ニ

熊耳餘先生之墓

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

大内熊耳傳



先師井上氏墓

清泉寺村竹林福寺ニアリ
惠宇サンノ尺祉碑陰ノ撰文ナリ

表ノ碑名ヲ記シ次ニ南朝小臣修撰支配行事ノ同守屋ノ氏
裏ノ碑文ヲ記シ次ニ年月日向後此墓ヲ守ル方事如ノ古文ナリ

大内熊耳傳

姓ハ安倍氏大内氏ヲ名乗ル其祖ハ安倍貞任ノ子孫ト云フ
安ハ文集ヨリ出ヅ

大内惠之丞 名承猶字子繩仕唐津侯
地中奉事院任開善退去住ヒトシ

敬心齋笑山 銀雪居士

熊耳先生逆誉尊忠大夫 實又

實ハ熊耳ノ諡号ニテ忠大夫實又ハ熊耳ノ
ニクノ熊実又事ヲ熊耳遺書ニ有ルヲ以テ

墓碑文集ニ載ル誌文ノ如シ

嘉永五壬子年
四月廿八日

大内熊耳

墓

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

863
3
233

19789

君諱永言字孝甫姓井上氏号吉十郎又号自求父曰義宣世仕補先鋒烏銃手隊下要大熊氏
生三子君其長以明和元年九月十七日生于東武凱長篤父給俸祝師青連院宮家司隠岐大輔
学書法書大進従之学君甚夙自儕以下大史十歳三百年人惟行賢愚敦不倦文化十一甲戌十
二月三日疾終于家享年四十六葬于浅草新寺街牧福寺法号曰青松院要北村氏生一子年
尚幼童其門人等経紀後事乗銘其墓亭亦有惟孝之牧同係之銘曰

板平能成　公家書式　千思真人　雅右惟勤　先鋒守隊騎士草加定環撰

平の先師井上氏ふ市谷甲村以先を従先隊の守兵なりの日ふ〻ら高原大学氏の等ありて生天の文化
化の年号年ありて父子生達ふ〻辛十生門ありふ〻並ふ勲傳の冒を記すし　亦の行人未詳ありて生三男
三男三男共在羽長ふ〻
一里井上孝子甲三男孫秀店
友於田氏他ふ去ふ〻ふ〻を字勉ふ務ふ〻て見ふの
ふり師角文ふの如ふ一生思を更ふふ大ふりふ以ふ人の歳の長名を治代ふ詩ふ字進加ふ〻て神備ナ
ふめミ

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用